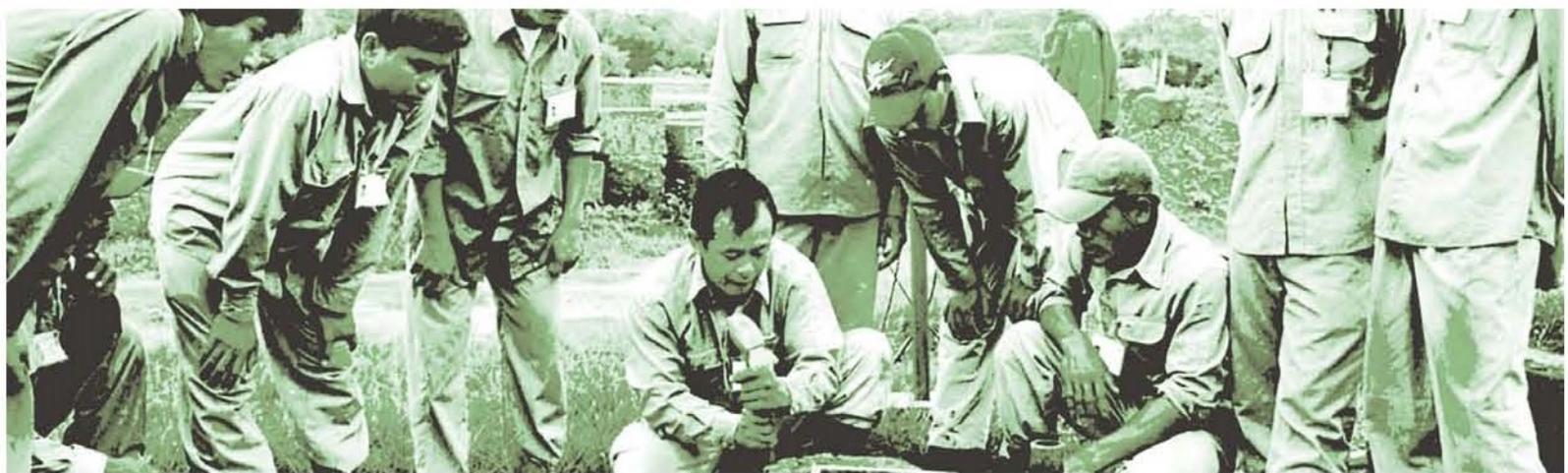




2013年 第8回 文化遺産国際協力コンソーシアム シンポジウム 報告書

世界遺産の未来 —文化遺産の保護と日本の国際協力



JCIC-Heritage

世界遺産の未来 —文化遺産の保護と日本の国際協力

Future of the World Heritage - Preservation of the Cultural Heritage and Japanese International Cooperation

日時： 2013年10月26日（土）13：00 – 17：30

場所： 国連大学 ウ・タント国際会議場

主催： 文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁

後援： 外務省、（独）国立文化財機構東京文化財研究所、（独）国立文化財機構奈良文化財研究所、（独）国際協力機構、（独）国際交流基金、（公財）住友財団、（公財）三菱財団、（公財）トヨタ財団、（公財）文化財保護・芸術研究助成財団、（公財）ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、（公社）日本ユネスコ協会連盟、日本イコモス国内委員会、**NHK**、朝日新聞社、産経新聞社、東京新聞、日本経済新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

序文

2012年に「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（通称、世界遺産条約）が採択されて40周年を迎えるなど、世界遺産は国際社会においてますます注目を集めています。しかし、条約採択当初から世界遺産をめぐる様相は変わりつつあり、自然災害や人為的な要因による破壊が顕著です。より長期かつ効果的な保護を実施するために、これまでの保護の枠組みを越え、より持続可能な開発やコミュニティーの役割と文化の活用の観点から、文化財保護のあり方を見直す必要性に迫られています。

日本はこれまでも高い水準の技術と知見をもって、1500件以上の文化遺産保護の国際協力を行ってきました。内容は多岐に渡り、文化遺産保護に必要な機材の提供から遺産の学術研究・価値評価・保存修復活動、そして遺産を守り伝える地域の人々を対象にした専門家育成活動・啓発活動などがあります。政府開発援助資金、各省庁予算、科学研究費などの日本政府による資金だけでなく、民間財団による助成や企業の社会貢献活動に基づく資金など、さまざまな形態の資金援助に支えられて国際協力事業が進められてきました。

このような活動が行われてきた中、「文化遺産国際協力コンソーシアム」は2006年6月に、文化遺産保護の国際協力の持続的発展に寄与し、国際協力のための協調的・連携的な共通基盤を確立するために設立されました。これは、2001年のアフガニスタン・バーミヤン遺跡の破壊を受け、2006年6月に公布された「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」を推進するための協議会です。当コンソーシアムでは文化遺産保護の動機を共有する機関や個人などの幅広い結集を図り、情報収集・共有と文化遺産の国際協力に関する調査研究を実施するだけでなく、研究会、シンポジウム、ウェブサイト、出版物を通して情報の普及活動を行っています。

本報告書は、日本の活動を中心に世界遺産の現場で文化遺産の専門家が行ってきた国際協力事例を紹介すると共に、専門家が各国で直面する課題や具体的な今後のあり方について検討した2013年に開催された国際シンポジウム「世界遺産の未来—国際協力として我が国に何ができるのか」をまとめたものです。日本のこれまでの活動と貢献を振り返り、文化財保護のさらなる国際協力の可能性を広く知っていただけるよう、編集・出版いたしました。

文化遺産国際協力コンソーシアムは今後もこれまでの歩みを持続し、さらなる協力の可能性と発展を目指してまいります。

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

例言

本報告書は、文化遺産国際協力コンソーシアムが2013年10月26日に実施したシンポジウムをまとめたものである。各発表は録音音声をもとに書き起こされたものを、報告書の体裁を正すために文化遺産国際協力コンソーシアム調査員宮崎彩が加筆・訂正を加えた。Rao氏の英語による発表・発言は英語をもとに日本語に翻訳しなおしたものであり、ユネスコ世界遺産センターの日本語・英語話者に確認をしていただいた。

尚、報告書内で使用した写真のうち、出典の記載のないものはすべて発表者の提供による。また、表紙で使用している写真も各先生方にご提供いただいたものを使用した。

表紙写真提供（上から（敬称省略））：

早稲田大学エジプト学研究所

前田耕作

石澤良昭

寺崎秀一郎

目次

序文	p.1
例言	p.2
目次	p.3
当日プログラム	p.5
挨拶	p.7
岡田保良 （文化遺産国際協力コンソーシアム副会長 / 国士舘大学イラク古代文化研究所所長） 山下和茂（文化庁文化財部長）	
文化遺産国際協力コンソーシアムの紹介	p.11
後藤多間（文化遺産国際協力コンソーシアム事務局長）	
講演集	p.15
基調講演 キショー・ラオ（ユネスコ世界遺産センター長）	
講演1 石澤良昭（文化遺産国際協力コンソーシアム会長 / 上智大学前学長）	
講演2 寺崎秀一郎 （文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員 / 早稲田大学文学学術院教授）	
講演3 近藤二郎 （文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会委員 / 早稲田大学文学学術院教授）	
講演4 前田耕作（文化遺産国際協力コンソーシアム副会長 / 和光大学名誉教授）	
パネルディスカッション	p.43
司会 関雄二 （文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員 / 国立民族学博物館研究戦略センター教授） パネリスト 講演者	
閉会挨拶	p.49
後藤健 （文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会委員 / 独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館特任研究員）	
パネリスト・司会者紹介	p.51

当日プログラム

開会挨拶 岡田保良 (文化遺産国際協力コンソーシアム副会長 / 国士舘大学イラク古代文化研究所所長) 山下和茂 (文化庁文化財部長)	13:00 ~ 13:10
文化遺産国際協力コンソーシアムの紹介 後藤多間 (文化遺産国際協力コンソーシアム事務局長)	13:10 ~ 13:15
【講演】 基調講演「世界遺産条約：課題と展望」 キショー・ラオ (ユネスコ世界遺産センター長)	13:15 ~ 14:00
講演1「アンコール・ワットの歴史の謎に挑戦ー現地の人材養成と世紀の大発掘物語ー」 石澤良昭 (文化遺産国際協力コンソーシアム会長 / 上智大学前学長)	14:00 ~ 14:25
————— 休憩 (10分) —————	
講演2「中米ホンジュラスにおける日本の文化遺産協力活動ー世界遺産コパンをはじめとしてー」 寺崎秀一郎 (文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員 / 早稲田大学文学学術院教授)	14:35 ~ 15:00
講演3「エジプト、王家の谷・アメンヘテプ3世墓の保存・修復作業」 近藤二郎 (文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会委員 / 早稲田大学文学学術院教授)	15:00 ~ 15:25
講演4「シルクロード沿いにあるバーミヤン遺跡の保存の現状」 前田耕作 (文化遺産国際協力コンソーシアム副会長 / 和光大学名誉教授)	15:25 ~ 15:50
————— 休憩 (10分) —————	
【パネルディスカッション】 「世界遺産の未来ー国際協力として我が国に何ができるのか」 司会 関雄二 (文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会長 / 国立民族学博物館研究戦略センター教授) パネリスト 講演者と同じ	16:00 ~ 16:55
閉会挨拶 後藤健 (文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会長 / 独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館特任研究員)	16:55 ~ 17:00

岡田 保良
(文化遺産国際協力コンソーシアム副会長／国土舘大学イラク古代文化研究所所長)

山下 和茂
(文化庁 文化財部長)

開会挨拶

岡田 保良

(文化遺産国際協力コンソーシアム副会長／国土舘大学イラク古代文化研究所所長)

皆様、こんにちは。本日は足元の悪い中ようこそおいでくださいました。僭越ながら開会のご挨拶をさせていただきます。本来でしたら、コンソーシアムをリードしていただいております、石澤先生、前田先生がご挨拶されるところかと思うのですが、ご両人とも今日はこの後報告をなさるといことで、私がお挨拶をさせていただくことになりました。

このコンソーシアムは2006年に発足いたしまして、いままでの仕事の見直しにちょうど差し掛かっているところでもあります。そんな折、昨年京都で世界遺産40周年を記念した会合がございました。その時をとらえまして、ユネスコの世界遺産センターからキショー・ラオ長官をお招きして、本日の記念すべきシンポジウムを開催する運びとなったわけです。タイトルを「世界遺産の未来 ―文化遺産の保護と日本の国際協力―」とし、開催させていただいております。

一言ご挨拶ということで、私としては是非皆様に知っておいていただきたいことが1つございます。今日の発表では、日本の海外における文化財の保存に関する協力について先生方にお話しいただきますが、実はそれぞれの先生方は日本が第2次世界大戦後、海外にいろいろな分野に調査にでかけられ、活躍され、その調査を担ってこられた先生方でもあります。したがって、今日のシンポジウムでお話しされる内容というのは、本当に日本の過去半世紀以上にわたる、いろいろな文化財調査に関わる蓄積の集大成になるのではないかと期待しております。キショー・ラオ長官には今後の世界遺産における日本の役割などもお聞かせいただけるのではないかと期待しております。少し長時間にわたるシンポジウムではございますけれども、ゆっくり堪能していただければ幸いです。簡単でございますが、開会の挨拶に代えさせていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。

開会挨拶

山下 和茂

(文化庁文化財部長)

ご紹介いただきました、文化庁文化財部長の山下と申します。開催にあたりまして、主催者の一員として一言ご挨拶を申し上げます。キショー・ラオ・ユネスコ世界遺産センター所長、石澤良昭文化遺産国際協力コンソーシアム会長、そしてご来場の皆様方、本日はあいにくのお天気で、お足元が悪い中、世界遺産シンポジウムにご来場賜りまして、まことにありがとうございます。

本日ここにお集まりの皆様は、いずれも世界遺産に深い感動あるいはいろいろな思いをおもちの方ばかりではないかと思っております。世界遺産は、多岐にわたるユネスコの諸活動の中でももっともよく知られたものの1つです。そして人類共通の貴重な遺産の保護という大きな成果をあげてきた制度であります。また同時に、この世界遺産が各国で定着し、その数も年々増え続けるに当たり、条約の本来の目的である遺産の保護をどのように効果的に行っていくかという課題も生じてきております。

おりしも昨年はユネスコにとって、世界遺産条約が採択されてちょうど40周年の節目の年にあたりました。日本におきましても、今日基調講演をいただくラオ所長のご協力も賜りながら、京都で40周年記念会合を開催いたしました。この条約40周年のテーマは、持続可能な開発と地域社会の役割です。近年では世界遺産をただの不動産と捉え、物理的な保存のみを考えるのではなく、世界遺産が存在する地域全体の持続可能な開発の中で、地元のコミュニティが大きな役割を果たしながら保護をしていく必要性が強く認識されています。昨年の京都の会合におきましても、こうした開発の観点、また地元コミュニティの役割について議論が行われ、京都ビジョンという文書にまとめられました。

本日は、ラオ所長による世界遺産条約の課題と展望に関する基調講演、それに続き世界各国においてまさに地元コミュニティと密着し、地域の人々と一体となって世界遺産の保護事業に長年貢献をされてこられた日本の諸先生方からご講演をいただきます。先生方の現場でのさまざまなご苦労や、遺産の保護に携わる喜びについてのお話をいろいろと伺いながら、会場の皆様方と一緒に世界遺産の未来についてぜひ考えてまいりたいと思っております。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

文化遺産国際協力 コンソーシアムの紹介

後藤 多間
(文化遺産国際協力コンソーシアム事務局長)

かずの状態であることが判明したため、遺跡の状況を正確に把握するための調査を行い、遺跡保存に向けたワークショップの開催などで協力を行いました。その後も日本人専門家の協力を得ながら現在でも着実に遺跡保護と2年後の世界遺産登録に向けた活動が続けられています。

以上のような活動を行うために基礎となる情報を収集するための活動が協力相手国調査です。いままでに13か国、ラオス・モンゴル・オーストラリア・ドイツ・ノルウェー・スウェーデン・ブータン・アルメニア・ミクロネシア・バーレーン・ミャンマー・フィリピン・スリランカを対象としてきました。これまで行ってきた調査の中には引き続き協力を要請している国もあり、相手国の意向を確認しながら、どのような支援協力ができるかを検討しております。現地的心声を反映させるのは、相手国調査の重要なミッションであり、現地の要望を聞き取った上で適切に対応するための体制を調整することがコンソーシアムには求められています。

最新の事例としては、2013年2月には、フィリピンの文化遺産の保護の現況とフィリピン側の協力要望事項などを明らかにするために相手国調査を行いました。これは、現地のフィリピン国家文化芸術委員会からの要請によるもので、スペイン植民地時代の教会や先史時代の貝塚、岩絵などの保存に対する関心が現地でも高まっていることを確認しました。担当者との面談や情報収集、意見交換を行った結果、人々の認識の向上により、歴史的建造物・考古遺跡の保護が進んでいる反面、文化遺産保護に対する教育部門が立ち遅れており人材育成が急務であることが明らかになりました。現在、我が国として何ができるかを検討するための情報を収集しているところです。

日本の抱える文化遺産国際協力の課題解決に向けたコンソーシアムの3つの取り組みを紹介いたしました。

どうぞ今後ともコンソーシアムへのご支援をよろしくお願いいたします。

キショー・ラオ

(ユネスコ世界遺産センター長)

石澤 良昭

(文化遺産国際協力コンソーシアム会長／上智大学前学長)

寺崎 秀一郎

(文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員／早稲田大学文学学術院教授)

近藤 二郎

(文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会委員／早稲田大学文学学術院教授)

前田 耕作

(文化遺産国際協力コンソーシアム副会長／和光大学名誉教授)

基調講演

世界遺産条約：課題と展望

キショー・ラオ
(ユネスコ世界遺産センター長)

文化遺産国際協力コンソーシアム（以下、コンソーシアム）会長の石澤先生、文化庁文化財部長の山下様、近藤様、岡田様、そして今回ご参集の皆様、本日はお招きくださり、どうもありがとうございます。また、コンソーシアムの皆様にも感謝を申し上げたいと思います。今回この場で、私の考えをお話することができて非常に嬉しく思っております。そして、このような悪天候の中、週末にも関わらず、心が萎えることなく、足を運んでくださいました皆様にも感謝申し上げます。

まず、日本が世界遺産の保全における世界的な国際協力と世界遺産条約の理念を推進する最前線の国のひとつであることについて触れたいと思います。日本は、当分野において貴重な技術的・経済的な協力を通じ、世界遺産条約の未来を議論する上でとても影響力のある役割を果たしてきました。本議題を日本国内で、日本が組織したシンポジウムで話すことができるというのは、とても意義のあることです。

世界遺産条約の未来に関する話し合いの中で、条約の将来あるべき姿を決定する上で重要となる標準設定の革新を提案するなど、日本は重要な貢献をしてきました。後ほど説明いたしますが、ノミネーションに必要な支援の初期プロセスにも日本は貢献をしています。2012年11月6日から8日にかけては、日本政府主催で世界遺産条約採択40周年記念最終会合が京都で実施され、今後の世界遺産条約の将来の方向性を示す京都ビジョンを採択するに至りました。

世界遺産条約が着想され始めた1950年代、60年代を振り返ると、同条約は時代のはるか先を行く洞察力のある内容だったと思います。当時はもちろんのこと、現在においても他の国際的な枠組みにはない特徴を携えているからです。中でも特に特徴的なのは、まず、遺産を全人類共通のものとし、同遺産のある国だけのものではないと認識している点です。これは非常に先見の明のある考え方でした。2つめの世代を超えた機会の平等性という概念も独特なものです。これらの遺産を守る義務が私たちにあり、現在だけではな

く、未来の世代も遺産を楽しむ機会が享受できるようにすることをうたっています。3つめは、遺産には文化と自然の2種類があるという考え方に基づき、それら2つをひとつの国際条約に収めた点です。したがってこれらの3要素は、同条約がいかに当時の基準よりも先を見ていたものであったかを示す特徴的な点であり、他とは異なる性質たる所以だと考えています。

採択された当初、国家管轄権を越えた遺産保全の議論が繰り広げられたことから、多くのコメンテーターも世界遺産条約をグローバル・ガバナンスの新たな形であり、国境を越えた世界を築くものかもしれない、と指摘しました。そしてこの条約の誕生は、第2次世界大戦後の国際政治における理想主義そのものであったといえます。世界大戦により特にヨーロッパで歴史的なモニュメントが多く破壊されたことから、重要な遺産を後世に伝え、保護していこうと国際社会全体が立ち上がりました。このことこそが、国際政治において非常に理想的な瞬間であったと言われる由来です。1972年に同条約が署名されてからの40年間を振り返ると、ユネスコのメンバー国195カ国中、ほぼすべての190カ国が批准・署名していることに誇りを持っております。世界遺産条約は、私たち人類に共通する遺産の著しい保護・保全に寄与するだけでなく、国際的な技術・経済的支援を援助が必要な国々に提供していく装置そのものともなりました。

さらに、同条約は不適切な開発の脅威から世界中の遺産を守ってきました。この条約の運用メカニズムがなければ、すでに多くのサイトが破壊されていることでしょう。また、同条約は、地元、地域、世界レベルにおいて、持続可能な開発を推進しており、サイト周辺だけでなくその周辺地域においても副次的な効果が見受けられるようになりました。

遺産の保全や保護がこの条約の目的であることに疑いの余地ありませんが、それが持続可能な開発を考える上でも心臓部となりつつあります。したがって、保全をこの条約の心臓部として据えた背景には、前世

紀半ばに遺産保護が懸念として持ち上がったからだといえます。例えばヴェニスやパキスタンのモヘンジョ・ダロなどの象徴的なサイトは大洪水などの自然災害によって失われかけました。他にも、アスワンダム建設によりヌビア神殿が浸水するリスクが明らかになった際、国際社会からは懸念や怒りの声が出しました。また、カンボジアのアンコールワットやインドネシアのボロブドゥールの遺跡も、長年にわたり放置され、一切管理の必要性が喚起されず、野放しの状態にありました。このような事例の相次ぐ出現により、人類の顕著な遺産の保護を実現するような国際手段や法的拘束力の必要性が指摘されるようになりました。

今日においてもこれらの保全や保護に関する懸念は継続しており、毎年世界遺産委員会会合の大部分の時間を割いて議論される問題であります。毎年、160から180か所の世界遺産の保全状況が議題に上がり、多くは重大な脅威にさらされています。これは、自然災害、人工的な破壊行為によるケースや、管理の欠如による破壊や放置、資源とキャパシティの欠如などによるものも含まれています。また特に文化遺産では、町や都市部の2種類が、そして自然遺産では油田や鉱山開発などの資源抽出による脅威が問題となっています。また、世界遺産が人工的、または自然災害の被害を受けることが増えており、近年では、地震、津波や洪水、気候変動の脅威にさらされるようになりました。現在、160か国で981件の世界遺産が登録されていますが、この数は年々増えているのが現状です。それに伴い世界遺産が地域によって自然災害の影響を受ける、または紛争などによって失われかねない可能性も拡大しているのです。

アフガニスタンの大仏が2001年の3月に破壊されたのを機に、紛争時における文化財の意図的な破壊も顕著になってきました。同様の事例は、現在マリでも見受けられており、ティンブクトゥ遺跡はある団体に占拠され、故意に狙われ、14個の霊廟が破壊されました。また、シリアでは、反政府勢力により古都アレップやクラック・デ・シュヴァリエという町が意図的に破壊されました。このような意図的な行為は無知や不寛容によって生じています。人々のアイデンティティや信念のシンボルを否定し、破壊することを意図しています。時には、紛争の原因に対して国際社会の注目を集めるために故意に破壊するケースもあります。

このような問題に直面し、文化遺産の意図的な破壊を阻止するには、国際社会が2003年の「文化遺産の

意図的な破壊に関するユネスコ宣言」を利用・参照し、推進していくべきだと私は強く思います。この宣言は、2003年にユネスコのメンバー国の共同の声として集約されたものです。世界的な知名度が低いことから、さらに推進していく必要があります。

世界遺産は、抑止するためではなく、様々な紛争の原因になる場合もあります。例えば、長きに渡り問題になっているエルサレムの旧市街の事例があります。また、プレアビヒアの寺院のように、東南アジアの周辺地域では近年、文化財への脅威が見られるようになりました。近年はこれらの事例からも分かるように、文化財保護で求められる国際社会の能力に疑問を投げかけるような傾向が見られるようになりました。

私たちは、世界遺産条約の精神にますます立ち返らなければならないように感じます。その精神というのは、異文化間の対話や世界の異なる文化間における相互理解や尊重を、文化と自然の価値を体言した遺産を通じてどのように世界に推進していくかを考えるものです。この理想は世界遺産条約の根底にある考え方であり、この崇高な概念を守るとは私たち全員の義務だと考えています。

サイトの保存状況に悪影響を及ぼす様々な脅威に加え、マネージメントの放棄や欠如といった問題がいくつもの世界遺産で散見されており、加えて保存基準の違いが国家間のみならず同国内のサイトごとにも表れているという状況もあります。このようなときこそ、効果的なサイトの保存活動に必要なとされる能力構築（キャパシティ・ビルディング）や技術支援などの国際協力や支援がより求められるところであり、日本の国際協力プログラムが長きにわたって世界に貢献してきた分野でもあります。

サイトの真正性（authenticity）および完全性（integrity）という観点から言えば、サイトを保存するための行為はサイトの「顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value、以下OUV）」に影響を及ぼすものであり、日本はこの分野においても1994年の「真正性に関する奈良ドキュメント」をはじめとして急先鋒を務めてまいりました。「真正性に関する奈良ドキュメント」は1964年の「ヴェニス憲章」を元に構成されたものであり、文化遺産の真正性を保護する上で非常に影響力のある文書です。来年にはこの「真正性に関する奈良ドキュメント」が見直されますが、「世界遺産条約履行のための作業指針」において進められている見直しも念頭に日本の専門家には検討

していただきたいと願っています。

例えば 2012 年にアラブ首長国連邦で行われた会議では、自然遺産に適用される完全性の概念がどのように文化遺産にも適用できるのかが議論され、いくつかの提言もなされました。これらは奈良ドキュメントを見直す過程でも取り上げられるでしょう。今年のはじめにインドのアグラで行われた会議では、開発事業が文化遺産の景観に与える負のインパクトについて討議が行われ、これもまた奈良ドキュメントに盛り込まれることになるでしょう。真正性と完全性に関する新しい基準を標榜する際に、こうした個々のプロセスが反映されるだろうと期待しています。

世界遺産条約の核心部には国際協力と連帯の概念が存在しますが、条約そのものは OUV を有する遺産の保存をうたっています。条約で最も重要なのはこの点ですが、OUV は非常に難しいコンセプトであり、どのようなものであるのかを人々に説明するには、用語そのものだけでなく概念としても大変困難なものです。したがって世界遺産条約はもちろん OUV を定義しておりますが、それによれば OUV とはある国内でのみならず国境を超越して広がる価値であり、現代のみならず後世にも通用する概念であるとされています。

しかし同時に、OUV の概念は加速的に進化を遂げています。例えばこの条約に長く関わってきたうちの一人であるカナダ出身のクリスティーナ・キャメロンの言葉を借りると、OUV の概念は「最上の中の最上」のサイトから「最上のなかの代表格」を認定するものへと変化しています。したがって異なる文化や地域を代表するものという概念が国際記念物遺跡会議 (ICOMOS) の用いる OUV の定義にも登場するようになります。同定義によれば、一般的に記載されていた文化遺産は最上のなかでも代表的なものであり、国際社会全般においてもそのように認められれば普遍的であるとみなされることを意味しています。そのため、代表性という要素は次第に重要になりつつあります。

一方で自然遺産に関する諮問機関である国際自然保護連合 (IUCN) は、世界遺産がそもそも地球全体の文化や自然遺産を完全に網羅するものではなく、条約批准当初の OUV の概念と相反する傾向だとしています。世界遺産リストは「最上の中の最上」だけを扱うものであり、多様な文化や自然の代表というわけではないのです。

信頼性があり偏りのない代表的な世界遺産リストを作るために実施されていたグローバル・ストラテジー

を皆様もご存知のことと思います。このプログラムの過程で世界遺産を異なる類型に分類したことこそが、OUV の定義を拡大させ、代表性として理解することになった理由の 1 つであります。たとえば現在では、産業遺産、文化的な景観、運河や文化的ルート・道路など、新たな類型として世界遺産リストで取り上げられるようになり、それぞれの類型内において OUV を認識するようになりました。OUV そのものが、時と共に変遷してきたのかがお分かりいただけたかと思います。

世界遺産条約では OUV を保有する世界遺産の保護に言及していますが、それぞれの時代において存在するトレンドや他の要因が推薦そのものに影響することもあります。商業的な要因やその他の要素を計算し、各国・各地域が世界遺産を推薦しようとする傾向は多々あり、世界遺産委員会の討議の場においてもこの傾向は毎年顕著になっています。OUV を明示しているからではなく、世界遺産という国際的な名声や商業的なメリットなどの思惑が絡んだ文化・自然遺産を登録しようとする多様な事例の圧力が世界遺産委員会では見受けられます。特に近年、このような世界遺産の登録過程に対する批判が寄せられています。

例えば商業的な利益の 1 つに観光を挙げることができます。観光産業は、現在世界で最も成長率の高い業界であります。70 年代に同条約が採択されたころには、観光によって生じる問題と機会については言及されることがありませんでした。また、条約を策定した人々でさえ、現在のような観光が文化・自然遺産に与えるプラス・マイナスの影響について考えることもありませんでした。

実際、観光客の伸び率は 2012 年前年比で 4% 増加しており、2012 年の観光客数は世界で 10 億人を超え、旅客運輸などいろいろな面で観光業がもたらした総利益は 1 兆 3000 億ドルを超える非常に巨大な産業となりつつあります。世界遺産登録を通じて観光産業を促進しようという動きも大きくなりつつあります。そのため、世界遺産の称号をマーケティングの手段として利用する現在の風潮には注意が必要であり、私たちは遺産の保全と保護や OUV について語り、地域社会と経済の持続可能な発展を促進していくことが求められています。

この条約は、標準設定の装置 (standard setting instrument) とも知られてきました。つまり、包括的に遺産を保全するために必要なインスピレーショ

ンとモチベーションを提供するものであるという意味で標準設定と呼ばれています。世界遺産条約第 5 条に着目すると、国内の包括的な遺産保護を促進するために、同条約がいかに国内の政策、法律、制度の成立に影響を与えるべきかを述べていることが分かります。

これに関連し、1972 年、世界遺産条約が採択される直前にユネスコの総会においていわゆる「文化遺産及び自然遺産の国内的保護に関する勧告」が採択されました。これは、文化遺産・自然遺産をともに網羅する勧告であり、世界遺産条約が定めるような著名度や OUV で定めたサイトだけに限らないという点で非常に重要な文書です。加盟国が採択している同勧告もまた国際的な標準を設定する装置であり、世界遺産条約の第 12 条にもあるようにリストに含まれていない国内遺産も平等に保護をしていくことが必要です。

さて、まさに今日のシンポジウムのテーマである国際協力についてお話しますが、これは非常に時期にかなったテーマであると思います。国際協力こそ世界遺産条約の中核にある概念であり、第 6 条・第 7 条ともに国際的な協力と援助で世界遺産を守ることを義務を定めております。先ほども申しましたが、日本は特に後発開発途上国や発展途上の小島諸国に対して、長年にわたる甚大な支援を提供してきました。私の記憶が正しければ、日本のユネスコの基金、信託基金を通じて、日本は世界遺産の保護に 8000 万ドルを支出してきました。

本日の先生方の講演の中では日本が行ってきた支援の説明があるでしょう。そのうちいくつかの事例を挙げますと、カンボジアのアンコール、アフガニスタンのバーミヤン、ネパールのルンビニ、ベトナムのタンロン、本日の報告で何度か触れられたミャンマーのバガンがあります。さらに、シルクロードの登録における日本の支援、ボリビアのティワナクとアカパナのピラミッドの保全や、火事で焼失したウガンダのプガンダ王墓の復元もあります。これらはどれも日本政府や日本人による国際協力プログラムの支援を通じて保護されてきた多岐にわたる遺産の数々のほんの一部にすぎません。

特定のサイトを保全するための支援を行うだけでなく、日本は発展途上の小島諸国における世界遺産登録を支援するグローバルなプログラムを開始しています。具体的には地元コミュニティの能力構築を支援しながら、これらの国に存在する遺産の「顕著な普遍

的価値」を明らかにし、世界遺産の登録を実現できるように支援しています。これは日本の国際協力によって実現したきわめて重要なものです。

しかし一般的には、国際支援や協力はこれまで特定の保全目標を実現するような成果をあげてきたとは言えないと思います。日本の保全努力だけに言及しているのではなく、特に危機遺産に対してはグローバルな協力が功を奏してきたとは言えないでしょう。現在、44 か所が危機遺産登録されておりますが、これらの多くは非常に重大な脅威にさらされているだけでなく、脅威の緩和、復元、再建には、多額の財政的・技術的支援を必要とします。この点において依然として埋めなければならない大きなギャップが残っていると思います。

効果的な保全や保護を成功させるためには、関係する利害関係者すべてが対等な役割を果たすことが必要です。専門家、政府機関や国際社会だけではなく、ローカルコミュニティやいわゆる先住民の人たちの参画を保存の全段階において確保することの重要性が認識されつつあります。だからこそ世界遺産委員会は「社会 (コミュニティ) 生活の役割 (role of communities)」を世界遺産条約履行のための戦略的目標「5 つの C」の 1 つとして採択したのです。これは Credibility (信用性の確保)、Conservation (保存活動)、Communication (意思の疎通)、Capacity building (能力の構築) に次ぐ戦略的目標の 5 番目の C です。

「世界遺産条約履行のための作業指針」における今後の課題の 1 つに、「自由な、事前情報に基づいた同意 (free prior and informed consent)」を地元の先住民社会から取り付けることの重要性があります。ニューヨークで開催された国連フォーラムにおいて、特に太平洋諸国やアフリカのいくつかのサイトでは、世界遺産登録をする前の段階において、自由な事前情報に基づいた同意を地元の社会から取り付けていなかったという事例が相次ぎました。先住民の人々が行ってきた宗教的儀礼や文化的な伝統や、生活そのものに必要不可欠なサイトの利用が阻まれるという問題が生じています。これは 2003 年に採択された無形遺産条約において重要な要素であり、世界遺産条約においても埋めていくべき穴 (ギャップ) の部分であります。コミュニティの役割は 2012 年の世界遺産条約採択 40 周年記念最終会合で採択された京都ビジョンでも採択されたテーマの 1 つです。

コミュニティの役割に加え、世界遺産の保全を通

じた持続可能な開発の推進も京都ビジョンの重要な柱として取り上げられ、それを推進できるようなサイトの在り方を実現するための考え方が、世界遺産条約の作業指針にもすでに組み込まれています。世界遺産委員会は京都ビジョンをベースにしたイニシアティブに基づいて、方針文書を発展させてほしいと要請しております。

皆様ご存じのように、2015年にミレニアム開発目標が見直され、更新されます。新たなポスト・ミレニアム開発目標は、文化・文化遺産の保護が持続可能な開発にいかに関与するかを考えてきました。ユネスコは文化が重要なドライバーとなり、持続可能な開発を実現する主体になるとして、文化の推進役を務めています。文化の中にはもちろん文化遺産が入るわけであり、その役割が非常に大きなものであることは明白です。

最後になりますが、世界遺産条約はこれまでの40年間、人類に共通する遺産の保護において非常に大きな役割を果たしてきました。間違いなく、これまで世界各地において顕著で象徴的なサイトの保護に大きな役割を果たしてきました。世界遺産条約は常に大きな課題に直面してきましたし、現在でも大きな課題を抱えています。しかし、国際社会が国際協力の枠組みのなかで、パートナーシップを組んで協力しあえば、この条約は本当の意味での遺産の保全という目標を果たすことができるでしょう。世界の社会・経済的な変化も考慮に入れる必要があります。同時に、世界遺産の都市においては開発の圧力がかかっています。例えば、現代的な生活空間を作るためにとか、あるいは石油・ガス・鉱物探査の影響により完全性が危機にさらされることもあります。これらの課題を過少評価するわけではありません。私たちに必要なのは、保存と開発のバランスをいかにして取り、推進していくかということと、未来の持続可能な開発について議論していくことです。

世界遺産保全の未来に関して私が重要だと思う課題を、6点にまとめてみます。まず、国際協力と支援を強化する必要があり、特に低開発途上国の危機遺産に的を絞って優先的に支援をするべきであります。そして、利害関係者、すなわち先住民・地域社会の参画をあらゆる世界遺産条約プロセスの場面においても確保すること。また、本当の意味で顕著で普遍的な価値を満たすものを登録し、ただ数を増やして世界遺産の価値を薄めるようなことがないようにしなければなりません。

せん。この点を曖昧にして登録することには何の意味もありません。

さらに、国際社会として強く声をあげなければいけないことがあります。特に武力紛争の際に、文化遺産が意図的に破壊されることがないようにし、文化の多様性を、条約を使って保護しなければなりません。また、40年の世界遺産保全の経験を世界遺産だけでなく全ての文化・自然遺産すべてに適用していく必要があります。そして先ほどの結論として申し上げましたように、世界遺産の経験を、持続可能な社会・経済発展の推進のために使っていくべきであります。

私の話が、皆様にいくつかの考えるポイントを提供できたのであれば幸いです。本日のシンポジウムでこれから発表される講演を聞きながら、考える際の材料にしていいただければと思います。ありがとうございました。

講演 1

アンコール・ワットの歴史の謎に挑戦 —現地の人材養成と世紀の大発掘物語—

石澤 良昭

(文化遺産国際協力コンソーシアム会長／上智大学前学長)

アンコール遺跡はカンボジアの民族的な誇りであり、世界遺産であります。私はその保存修復が、カンボジア人自身によって推進されることを願っています。「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」が人材養成の大方針だからです。カンボジアでは内戦により多くのカンボジア人保存官たちが亡くなりました。彼らに対する鎮魂の思いを背景に、1991年から現在に至るまで上智大学アンコール遺跡国際調査団は人材養成に取り組んでいます。

往時の時代精神を見極める作業

現代の日本においては、経済効率を最優先します。ITが進み、顔の見えない他者との交信を楽しみ、思考力の要らない情報があふれています。しかし、私たちは文化遺産に託された人間の生きざまを学んでいこうというのが1つの提案です。遺跡に託されたメッセージは目に見えませんが、見えないものを見ようとする努力や感じようとするイメージーションが求められます。

文化遺産研究は、そんな目に見えない人間の生きざまを看破し、意味づける仕事です。そして残された兵どもの夢の跡や寺院、そして村落社会跡を手堅く精査し、往時の社会・経済活動を文献史料から検分し、そして遺跡や図像の意味づけを解析し、往時の時代精神を科学的に検証していくことです。



村人が僧侶にお食事を差し上げているところ
(カンボジア、シェムリアップ州、スラ・スラン村)

文化遺産に託されたメッセージは人間賛歌そのものであります。私たちは、かつて生きていた人たちが社寺仏閣(文化遺産)に託した祈りを、願いを、悲しみを、夢を想像し、解釈し、納得しようとしています。つまり遺跡というのは人間の生きざまを建物という空間に再現し、図像という具体的な姿形により我が身に引き寄せて問いただす具体例となっているのです。私たちは遺跡を通じて「人間」を考えることになるのです。

上智大学による自前発掘・自前修復・自国研究の支援

カンボジアの人たちは、現在もとても信心深い人たちです。そしてカンボジアに出かけていってみると、そこには生きる喜びが満ち溢れているのを感じます。貧しいのに何故なのか。それは人々の心が満たされ、人間の本来の考え方が健全に機能し、巨大な自然と真っ直ぐ向き合って暮らし、それぞれの生活の中で満足を感じているという当たり前のことです。その心の拠り所は仏教であり、それにより精神の平安を得ている人々です。

そのカンボジア西北部のシェムリアップ市郊外には世界的に有名なアンコール・ワットをはじめ、主要な遺跡62箇所があり、そこは9世紀から約600年にわたりアンコール王朝の首都であり、各時代の26名の王たちが造営した石造の寺院、僧院などの大遺跡が集中して見られます。1992年に世界遺産に登録されました。

上智大学は1980年以来カンボジア王国政府と協力し、中・長期計画に基づく自前発掘・自前修復・自国研究ができるカンボジア人専門家の養成を目標としてきました。その拠点として1996年に現地にアジア人材養成研究センター(以下、センター。290㎡、2階建て、宿泊室9室、研究室)を建てました。私たちは上智大学アンコール遺跡国際調査団(以下、調査団)を組織し、現在もカンボジア人保存官候補者や石工の現地実習を実施中です。私たちの国際協力の哲学は「カンボジア人による、カンボジアのための、カンボジアの遺跡保存修復」であります。

22年目を迎えた人材養成活動—カンボジア人専門家の誕生を喜ぶ—

私自身は1961年からカンボジアに文化遺産研究のため留学し、アンコール・ワットの研究と保存修復を続け、53年の歳月が流れました。そして1980年、内戦中にアンコール遺跡の破壊状況を調査するためシェムリアップへ出かけました。当時カンボジアは日本と国交がなく、ベトナム経由で5日間かけてアンコール遺跡にたどり着きました。カンボジアでは1970年から内戦に入り、アンコール・ワットは1993年までの24年間放置されたままでした。さらに、ポルポト政権の時代(1975-79)に遺跡保存官36名が不慮の死に追いやられました。遺跡を守るカンボジア人たちがいなくなったのです。

個人的なことを言わせていただければ、1961年から私が一緒に遺跡の保存修復の現場で働いていたカンボジア人同僚の保存官たちが死んでしまったのです。アンコール遺跡を何とかしなくてはならないと私を駆り立てるものは、彼らに対するせめてもの鎮魂の気持ちであります。

人材養成プロジェクトは、王立芸術大学の再開および平和のきざしが見えてきた1991年3月から始まりました。それは考古発掘調査および保存修復を指揮できる将来の保存官および中級レベルの技術をもった幹部建築家と石工の養成の3本立てで始まり、22年目の現在も続いています。

王立芸術大学考古・建築両学部の学生の中から選抜して研修生として採用し、3年から5年の考古発掘・遺跡修復の現場実習を経た後に、大学院の学位を取得させることにしています。彼らは上智大学大学院の修士・博士両課程においてアンコール遺跡研究やカンボジア本国研究に取り組み、現地踏査に基づき、英語で



石澤が遺跡内で講義をしているところ
(1991年、バンテアイ・クデイ遺跡)

学位論文を書いています。2014年3月までの成果は、博士号取得者7名、修士号取得者11名です。彼らはカンボジアに戻り政府閣僚評議会専門委員、文化芸術省副局長、プノンペン市観光局次長、プノンペン大学副学長、王立芸術大学教授および講師などとして活躍しています。

センターには教職員2名が派遣されています。アンコール・ワット修復のための石工養成の様子がNHK番組のプロジェクトX(2001年11月放送)に採り上げられました。

アンコール王朝史再考—仏像280体が発掘された—

考古発掘実習を始めて11年目にあたる2001年に、偶然にもバンテアイ・クデイ寺院(12世紀末頃建立)の境内から274体の廃仏が発掘されました。2010年には同じ境内からさらに6体の仏像が発掘されました。

発掘状況から考察すると、それら仏像埋納坑は深さが地上から約2m、底面一辺が約2mの四角の穴に埋められました。地中であって約800年にわたり温度も湿度も一定であったため、保存状況はきわめて良く、高貴で美しい尊顔を拝むことができます。これら仏像の時代は10世紀から13世紀です。アンコール遺跡の存在が世界に知られてから約160年経ちましたが、今回のように大量の廃仏が発見された例はありません。

これらの仏像は、砂岩でできていて、泥まみれの美しい尊顔には、きれいな御髪にイヤリングをつけ、慈悲を示す顔貌にひたすら瞑想している様子がわかります。この仏像の上半身は、清楚で温顔そのもの、思わず手を合わせたくほどの臨場感に溢れています。仏像の前で合掌する村人たちはその篤信の心が満たさ



274体の仏像大発見
(2001年、バンテアイ・クデイ遺跡)

れているのです。

これらカンボジアの国宝の大発見は、11年にわたるカンボジア人保存官候補者の研修中の出来事であり、彼らの手で発掘されたことを何よりも喜びたいです。この発掘はフランス極東学院の学者たちが100年かかって構築してきたアンコール王朝末期の歴史を塗り替える大発見にもつながったのであります。そして、2010年に同じ境内から6体の仏像が発見され、全部で280体が見つかったこととなります。これらの仏像は上智大学が建設したシハヌーク・イオン博物館に展示されています。

アジアの「隣人」のところへ出かけて、ソフィア・ミッションを実施中

遺跡の調査研究・保存修復の事業を通じて、カンボジアの人たちと強固な信頼関係を結んできました。私たち調査団の基本的な立場は、「国際協力とは人間の協力」であるというきわめて単純なものであり、遺跡保存活動の領域で肌の色、言葉の壁を突き破り、個人レベルでどれだけ「国境のない信頼関係」が構築されるかにかかっています。

私たちはまずカンボジアには学ぶべき「知」の遺産があり、そのうえで自らが日本の「知」を語るという姿勢を貫いてきました。それがカンボジアの人たちの信用度(クレディビリティ)を高めてきたのだと思われれます。

シハヌーク前国王は「カンボジアが困難に直面していた時期にアンコール遺跡の保護のために手を差し伸べてくれた。私たちは最初に井戸を掘った人を忘れない」と1992年のユネスコとの会議で述べられました。

カンボジアでは私たち調査団の名称をソフィア・ミッション(Sophia Mission、Sophiaは上智大学の英



アンコール・ワット西参道の修復工事現場
—カンボジア人作業員が頑張る

語名)と呼称し、名乗っています。本学の教育の精神は「Men and Women for Others, with Others(他者のために、他者とともに生きる)」を掲げ、文化も宗教も異なる「他者」と隣人になるには、向こうから来るのを待つのではなく、私たちから自ら出かけていくことが必要なのです。

私たちアジア・ソフィア・ミッションは、この建学の精神に基づき、「他者」であるアジアの「隣人」のカンボジア人のところへ出かけて行き、アジア現地においてカリキュラムを組み、地元の人材を育てるという「上智大学モデル」を実施しています。

ソフィア・ミッションはアジアの仲間と共に「21世紀の市民」を育てる使命を果たすべく、惜しみなき奉仕の精神を発揮しています。これまでの22年間の実績は国内外から高く評価されており、「アジア知性発掘作業」の21世紀版を自負しております。カンボジアでは誰も手を差し伸べてくれない1980年代から頻りに現地に入りし、地域の自立を支援しています。地元で溶け込み、その名前を知らない人はいません。カンボジア人へ密着しているソフィア・ミッションです。

再び危機遺産リストに入らないために—ISO14001取得

アンコール遺跡群は、1992年に世界遺産に登録されましたが同時に危機遺産リストに入り、その12年後の2004年に解除されました。その解除理由は国立アプサラ機構(アンコール地域遺跡整備機構)が自前で保存修復の事業を実施できるようになったからです。上智大学の1991年からの人材養成活動(学位取得者(18名)および石工養成)が実を結び、カンボジアにおいて着実な実績を挙げてきたからにはほかなりません。

しかし、問題がなくなったわけではありません。アンコール地方には、2003年には約53万人の観光客が訪れました。この観光客の急増にともなう膨大なゴミ、車輻による大気汚染、河川の水質悪化、ホテル建設による自然林破壊、歴史景観の消滅など、周辺環境の劣化は著しいものがありました。ユネスコは懸念を表明して、上智大学は学外共同研究のアンコール・ワット環境教育プロジェクトを提案しました。アプサラ機構はすぐに環境マネジメント局を新設し、国際標準化機構(ISO)の環境管理規格(ISO14001)の取得を目指しました。アプサラは2003年5月から職員、

技官に対して環境教育を開始しました。アプサラ職員は遺跡内の売店や屋台に出かけ、ゴミの散乱状況を調査しました。村々ではパゴダの僧侶や村長らにゴミの減量を求め、アプサラはゴミ会社を設立し、ゴミの回収も始まりました。環境教育事業は3年かかって成功し、2006年にISO14001の認証を取得することができました。

カンボジアの「知」を学ぶ

私は遺跡を見る時、私のあらゆる感覚を総動員して、当時の人たちの気持ちを自らの体内に取り込もうとして、遺跡の上から下まで歩き回ります。遺跡に魅せられた私と遺跡との対話が始まります。その相手は参道、楣石、壁面浮彫り、身舎の建築装飾、境内の空間、建物の宇宙観、遺跡の周りの歴史景観、自然風景など多様です。遺跡内を自らの足で歩き、目で見、耳で聞き、手で触れ、香りを嗅ぎ、そして考えます。感性に立脚した私の遺跡巡りです。

私たちはこれまでに遺跡近隣の村々で文化摩擦を起こしています。日本では当たり前のやり方が、ほかのアジア諸国では通用しないという事例がたくさんあります。しかし、現地の村人や地域住民から学ぶことがたくさんあります。私はアジアの現場から学ぶ主義をとっています。この地方の影絵芝居を見るとか、民話を聞くこともあります。いつ田植えをすとか、どうすれば雨水が抜けるとか、この木の実には薬効があるとか、毎日教えられることがあります。地域や民族の歴史を包含した固有性を解明するためには、時間と空間を凝集した文化遺産、つまり遺跡を隅々まで調べることです。そこには当時の人たちの活動の集大成が結晶していると言えます。

ギリシアの哲学者ディオゲネス Diogenés (B.C.410-323?) は、アテネ市内を歩く時、昼間でもランプに火を灯していました。周りの人たちが何故かと問いただしたところ、ディオゲネスは「本当の人間を探している」と答えたといいます。私は広い遺跡の中を歩く時、必ず懐中電灯を持ち歩いています。陽のあたらない箇所や回廊の天井の高いところ、土台石に彫られた浮彫りなどを照らしながら、ゆっくり丹念に調べるのです。私は当時の人たちがこの遺跡に託した願いや祈り、来世を探しているのです。

講演2

中米ホンジュラスにおける日本の文化遺産協力活動 —世界遺産コパンをはじめとして—

寺崎 秀一郎

(文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員／早稲田大学文学学術院教授)

皆さま、こんにちは。いまご紹介頂きました寺崎でございます。冒頭の岡田先生のご挨拶の中で、本日のシンポジウムは戦後の海外調査の集大成であるというお言葉がありましたが、いまからお話しする中央アメリカの事例は、もっとも後発の考古学調査、および文化協力事業ということになるかと思えます。

なかなかホンジュラスという国がどこにあるかピンと来なくて、実は私も行くまで詳しく知りませんでした。ホンジュラスは北アメリカ大陸と南アメリカ大陸を結ぶ細くなっている部分、いわゆる私たちが中米と呼んでいる場所ちょうど真ん中に位置します。メキシコのユカタン半島よりもやや南に当たりますが、この地域、ホンジュラスという国で、日本人の関わる考古学調査というのは、大体3つほどです。1つがエントラダ考古学プロジェクト (PALE) と呼ばれるもの、2つめがPICPAC というコパン統合保存プロジェクト、そして3つめが現在進行中のコパン考古学プロジェクト (PROARCO) です。コパン考古学プロジェクトというと、アメリカ人がやっていたものもありますが、それはパック (PAC: Proyecto Arqueológico de Copán) と呼んで別のものとして区別しています。1番はじめのエントラダのプロジェクトが始まったのが1984年で、そういう意味ではつい最近ということになるかと思えます。

私たちの関わってきたこれらの考古学プロジェクトは、ホンジュラスでもっとも西のコパン県エントラダ地域、それからグアテマラとの国境地域にある世界遺産のコパン周辺で行われてきました。この地域は、いわゆるマヤ文明圏の一番南東端に当たります。そういう意味では、少し東の中央ホンジュラスの方に行けば非マヤ地域があり、非マヤ地域とマヤ地域のコンタクトゾーンに当たるといえることが言えます。

今日はこの3つのプロジェクトについてご報告したいと思います。まずコパン、エントラダ考古学プロジェクトですが、これはもともと青年海外協力隊ベースで始まったものです。実はその青年海外協力隊ベースでこのホンジュラスの調査が始まったということ

が、おそらく私たちの文化協力活動というものを非常に強く性格づけていると思います。第1フェーズでは、まったく何も考古学的な調査が行われていなかった地域なので、いわゆる遺跡の分布調査が中心に行われました。その成果を受けて、遺跡公園の建設・開園にむけた調査・修復事業が行われました。この国では、世界遺産のコパン遺跡に続く、第2の遺跡公園です。この修復事業を通じて、日本人が再び活動することになりました。これは1992年当時のエントラダプロジェクトの様子で、ここにいるのは20数年前の私ですが、当時はまだかわいいものですよ。私はとくにマヤ考古学を志していたわけではないので、アルバイトのつもりみたくこの調査に加わりました。そのため、まさか今日この場でこのようなところに立つとは当時思いもよらなかった。



1992年のエントラダプロジェクトの様子



完全な状態で見つかったピラミッド

おかげで第2の遺跡公園、国立遺跡公園は非常にきれいな状態で1994年に開園にこぎつけました。1994年の開園以降、同遺跡の中で調査を行っていますが、たとえばこの正面に写っているいわゆるピラミッド型の建造物の中からはほぼ完全な状態で埋まっている建物がみつかりました。

建物の中からは、土偶のように見える人物像型の香炉が見つかりました。頭の上に穴が空いていてそこから煙がモクモクと出るようになっていますが、これと非常によく似たものがコパン遺跡からも出ています。コパン遺跡の第12代王の副葬品として埋葬されたものと比較しても非常によく似ています。実はこの香炉の周辺から採取した炭化物などの年代測定を見るとコパン王の埋葬年代と非常に近い年代を得ることができました。しかしこの遺跡ではなかなか立派なお墓が出ないので、現在も調査を行っています。

これは今年の夏の調査の様子です。本来は建物の真ん中にトンネルを開けてお墓を見つける予定だったのですが、実は隣の建物とくっついていることが分かり、2つの建物を一緒に調査しないと様子がわからないことから、大きな計画変更を迫られることになりました。ここでは遺跡公園の開園や発掘調査のほかにも、遺跡公園の中に流れている川が遺跡を侵食する可能性があったので護岸工事も併せて行っています。私たちのこうした土木工事に関する技術や知識が不十分なので、青年海外協力隊のシニアボランティア制度を活用して日本人の技術者の方に来ていただき、護岸工事などを行いました。これがそのエントラダのプロジェクトでした。



ロサリラ神殿のレプリカ

ばれる石彫技術や、奥に石碑で手前に祭壇、石碑・祭壇信仰のセットみたいな非常にわかりやすい形で見えます。また、マヤ世界でもっとも長いといわれている神聖文字の祭壇、神殿26番やマヤ世界でもっとも美しいボールコートと呼ばれている球戯場もあり、いいことばかりなのです。あるいはコパン歴代16人の王の姿すべてが彫られている祭壇Qなどもものすごく有名だと思います。このコパン遺跡についてはすでにアメリカ人を中心に100年以上、約120年間調査されてきました。その結果、外側から見える部分だけではなく、アクロポリスの中にごく初期の神殿が埋まっていることがわかりました。

これはロサリラ神殿と呼ばれるものですが、もちろんこれは本物ではなく剥ぎ取りといい、シリコンなどを使って埋まっている建物の表面の型を取って外に作ったレプリカです。



コパン遺跡はこのように非常に長い間、外国の研究者が主導して調査を行ってきました。1998年ホンジュラスをハリケーン・ミッチが襲った際はコパン遺跡周辺は打撃をそこまで受けませんでした。翌年の大雨により大きな被害が生じました。それと相前後して動き始めたのが、PICPACというコパン統合保存プロジェクトです。それまでのアメリカ人を中心としたアクロポリスのトンネル発掘調査から少しシフトし、遺跡を保存していくための資金獲得を含めて動き始めたプロジェクトでした。

PICPACについては、今日またホンジュラスに行かれた金沢大学の中村誠一さんがディレクターに着任され、主導してこられました。このPICPACで非常に大きな成果の1つは、コルテと呼ばれる部分の修復と、中心的な役割を担ってきた修復保存だけでなく緊急調査に対応する行政調査的な部分です。かつてコパン遺跡のアクロポリスの近くに位置するコパン川が動いた

ことにより、がばっと削られた部分をコルテといいます。高さが37メートル、幅が約300メートルあります。おそらく世界で一番大きな遺構断面図ではないかと思いますが、簡単な修復はしてあったものの大雨でこれが崩れ落ちるという事態が発生しました。そこで緊急対策や保存修復としてこのPICPACの活動の場が与えられたのだと思います。現在は保存、補強がしてあり、すこしみっともないのですが、ビニールチューブから中にしみ込んだ水を外に排出しています。以前このような設備が無かったため、水の重みで崩れてしまったという経緯があるからです。



ビニールチューブなどを使い補修している

コパンの場合、トンネル調査が盛んに行われたのはこのコルテのおかげでした。断面が見えているので、調査チームはこの床に沿って発掘を始めればよかったわけです。たとえばかてつの床が横の線として見えます。正確な長さは誰もわかりませんが、全長数キロメートルにわたるトンネルがこのアクロポリスの中にはりめぐらされており、今後もそのトンネルの補強が大きな問題となってきます。

このPICPACではそのほかにも道路の拡張などの問題に対応して、発掘を行いました。その中で10J-45と呼ばれるところでは墓が見つかり、被葬者がヒスイの胸飾りをつけているのがわかりました。見つかったヒスイの胸飾りは王様の印のごご模様になっています。この墓はコパンのアクロポリスの外で見つかった最初の王墓になるかと思っています。おそらくコパンの第5代から7代目までの王様の誰かということぐらいしか、いまのところわかりません。墓とそれとともなう副葬品や、墓の近くでは広場の真ん中に埋納遺構も出ていて、その中にはウミギクガイ、その中にヒスイの人物像、その他ヒスイ製品を詰めた石製の容器が埋められたりしたわけです。

こういうことを進めていたのちに、PICPACはコパン考古学プロジェクト（PROARCO）へと発展的に変わっていきます。ここではコパン遺跡の中心グループ、いわゆる遺跡観光で訪れるコースの北側にある居住グループの調査修復をその主要な目的としました。

このPROARCOではいまままで公開しなかった部分を整備することによって遺跡公園を拡充させるということ、それからあわせて遺跡公園の周辺の整備も行っていくことを始めました。



遺跡公園と周辺の図

9L-22、23というPROARCOの対象ゾーンというのは地図の北側の部分です。このグループを選んだ1つの理由は観光客のルートの拡張という観点からでした。一般に観光客の導線は遺跡公園の入り口から直進し、グレートプラザを経由してアクロポリスに向かうか、あるいは、その逆のルートを利用します。しかし、観光客の増加に伴い、グレートプラザの北側に見学可能なゾーンを拡張し、遺跡公園内の観光客を分散させることが目的でした。自然遊歩道も整備しました。

ただ9L-22、23というグループは、修復が終わった後で滑り台のように見えますが、実は今から60年程前にトラクターを入れて遺跡ががばっと壊された跡です。これは飛行場建設のために当時のホンジュラス政府によって壊された部分です。結局飛行場はここにはできませんでした。そういったダメージを受けたところや残された建造物を実際発掘すると、かなり状態の良い骨が100体以上、副葬品をもつような墓もいくつも検出しました。中にはかなり立派な副葬品をもつものもあります。おそらく貴族の居住区で、非常に立派な副葬品をもつグループでありました。

隣接した建物とつながっており、トンネルを開けることが難しくなった建物

これから先はコパンの話をしていきます。コパンは1980年という非常に早い段階で世界遺産登録されており、私たちが入るとつくの昔に世界遺産でした。コパン遺跡と言うのは例えばハイ・レリーフ、高浮き彫りと呼



滑り台のように見える 9L-22,23

このPROARCOで行ったケースでは、ただ遺跡を保存して発掘して修復するものではありません。たとえばこれはCentro de Interpretaciónと言いましたが、日本の援助で遺跡の中に簡単なミニ博物館を作りました。昨年9月についてオープンしまして、当時の在ホンジュラス特命全権大使の加来大使、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所の所長、中村誠一さんやコパン遺跡公園の責任者、サルバドルさんが参列されました。遺跡の中にこうした小さな博物館を作るのはほかにも類例があり、たとえばティカルの神殿5番の前に同じようなものがあります。これはスペイン政府の援助により神殿5番というのを修復したので、いわばスペインの協力やプレゼンスを示す意味もあります。ここもまったくそうではないとは言えませんが、実際は野外に遺物を置くわけにはいかないので発掘のプロセスとかその解釈についてできるだけ分かりやすいような展示を用意したという経緯があります。



このような遺構が多く見られる

ここは遺跡の中心グループのような巨大な神殿があるわけではないので、実際保存修復しても地味です。こういう石段が四角く並んで広場を作っているのは典型的なパターンですが、そういったいわゆる神殿型の

魅力がないので、従来と少し変わった展示方法を考え、実際にお墓が出た場所、墓を確認した場所に「こういう状態でこの位置に骨がありました」というレプリカを展示しています。賛否両論はありますが比較的に来た方には好評です。

こういった発掘調査、保存修復のほかにも、周辺整備として遺跡公園から村までの遊歩道の整備計画も実施しました。この写真では観光客の皆さんが歩いていますが、実際には地元の人たちも利用しています。そういう意味では非常に役に立つかなと思います。これらのことをこの10年間行ってきました。



観光客と地元の人が使用する整備された道路

ホンジュラスにおける私たちの調査研究にはまずこの3つのポイントがあります。1つめはこの遺跡公園の建設や整備、あるいはその維持管理を含めて資源の活用という問題。2つめがさきほど石澤先生のお話でもありました人材育成の問題です。これは1つには現地の方、ホンジュラス人の考古学技術者と言われる人たちの養成だけのことではありません。日本の文化協力活動の中で日本人自身が育てられていく環境で、私たち日本人が彼らから学びつつ育つチャンスをいただいていると思います。たとえば私がそうですけれども、さきほど名前が挙がった中村誠一さん、それから茨城大学の青山和夫さん、アリゾナ大学の猪俣健さん、実は皆エンターダプロジェクトの出身です。

それから3つめですが、考古学調査、保存修復事業というのは非常に多くの人が働く必要があります。PROARCOはかつてはコパンの村で1番大きな「企業」で、雇用を作りだしていくことが出来ました。つまりここは観光地なのですが、観光客は1年中いるわけではありません。忙しい時と忙しくない時があります。そうすると雇用は安定しない部分がありますが、考古学プロジェクト、修復プロジェクトというのが通年で

動いていれば、ある程度の雇用を確保できる。それからもう1つは発掘調査、修復作業というのはどうしても熟練の技術が必要だということです。今日から働きますから宜しくお願いしますという人がいきなりベテランと同じようにはできません。そういったときにプロジェクトを作っていくということが、技術の継承に繋がっていきます。現実にはこのところ私たちも資金面でいろいろ苦勞していたり、アメリカ人の調査プロジェクトも縮小してきています。したがって新しい世代の人達が育ってきていないという現状があります。私と一緒に働いている人も今63歳なのだそうです。63歳で現場の仕事はそろそろきついだろうと思うのですが、若い世代が育ってきていない以上、その人たちに頼らざるを得ないという問題が生じています。それを何とか乗り越えたいと思うのですが。

少し短いですが、私たちはこういう感じで今進めております。以上でございます。ありがとうございました。

講演3

エジプト、王家の谷・アメンヘテプ3世墓の保存・修復作業

近藤 二郎

(文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会委員／早稲田大学文学学術院教授)

ご紹介に預かりました早稲田大学の近藤です。本日はスライドを使いながらエジプトの王家の谷で行っておりますアメンヘテプ3世墓の壁画の保存・修復を中心としてご報告させていただきます。

王家の谷の西谷にアメンヘテプ3世墓があり、テントを張って調査をしています。王家の谷というのは、ご存知のようにツタンカーメンの王墓などがあるところですが、実は東谷と西谷という2つの谷に分かれています。広く細長く伸びている西谷にアメンヘテプ3世墓があります。



調査をしている王家の谷

王家の谷の墓は英語の King's Valley の略称で KV と呼ばれ、アメンヘテプ3世墓は KV の22番です。私たちは1989年からここで考古学的な調査を行っています。王家の谷は、上の方が平らになっており、海の底に沈んでいたところが隆起した場所なので、ここで調査をすると山の上の部分に貝やヒトデの化石などがあります。

アメンヘテプ3世の王墓は、谷に面した入り口から中をずっと入っていく構造になっており、この墓は1799年にナポレオンのエジプト遠征の時に再発見されました。学術調査の報告である『エジプト誌』という本の中にもこの墓の記載があります。王墓の入口にはエジプトの中では非常に古い落書きがあり、1804年に「John Gordon」というイギリスの人物が刻した名前と年号があります。

ナポレオンのエジプト遠征以降、ほとんどの有名なエジプト学者がこの墓に入っております。ヒエログリフを解読したシャンポリオンほか、名だたるエジプト学者がこの中を簡単に見学しておりますが、私たちが1989年に調査を開始するまでは図面すらありませんでした。それで正確な王墓の平面図と立面図を作ることから始めました。

王墓の入口部分が高度170メートルのところであり、1番低いところだと150メートルぐらいまで掘られているので、20メートルぐらいの深さがあります。ここから入ると奥行きが80メートル以上あり、18王朝最大の王墓です。

私はいまエジプト学研究所の所長ですが、前所長の吉村作治先生と2人で最初に調査を始めて以来、11年間に15回の調査を行いました。毎年1回から2回調査を行い、この王家の谷の西谷で地図を作ったり、発掘調査などをしたりしていました。この地域は発掘がきちんと行われていなかったため、周囲を全部発掘し、周りにある小岩窟墓なども全て入れた図面を作りました。

また、内部の調査によりますと、いくつかグラフィティと呼んでいる古代の落書きが出てきました。「治世3年アケト季第3月7日」と書いてありますが、おそらくアメンヘテプ4世(後のアクエンアテン王)の時代にあたるかも知れません。非常に重要な落書きなどを記録しています。

私どもが入った20年前にはまだ内部に堆積土が50センチメートルぐらい積っていましたので、この堆積している土砂、砂礫の除去から始め、その後壁画や碑文の解読、報告等を行うようになりました。節にかけて墓の中に堆積した砂礫を精査したところ、さまざまなものが出てまいりました。王の名前のあるファイアンス製の腕輪や、王妃のシャブティという小像の首の部分を発見しています。

このアメンヘテプ3世墓は、1915年にツタンカーメン王墓を発見したことで知られるハワード・カーターが、カーナヴォンの援助を受けて1ヶ月間だけ

発掘調査をしました。その際にカーターは、王妃のシャブティ像の胴体部分を発見しております。この王妃のシャブティ像の胴体部分はカーナヴォンの居城であったハイクレア城に現在も保管されており、私たちが王墓で発見した王妃のシャブティ像の首のキャストを作りハイクレア城に持っていったところ、見事に接合することができ、同一のものであることがわかりました。

あるいは面白いところでは、王のミイラが入っていた金貼りの木棺の一部なども発見されており、これが完全な形で残っていれば、実はツタンカーメン王の金貼りの木棺と同じようなものがあったと思われます。

私どもの調査が終わり、この墓をどうしていくかという時期にさしかかったのが12年ほど前の2000年頃ですが、この時期からエジプトでも遺跡の保存修復が非常に熱心になり始めました。そこで私たちも発掘だけをして終わるのではなく、その後の復元・修復の作業もやることになりました。

たとえば修復が終わったIという部屋の壁面には、王と神々の図像がずっと描かれています。王権を守護する鳥であるハゲワシの飛んでいる姿が描かれています。ハゲワシの真下に必ず王が描かれることから、王の像が削られてなくなってもハゲワシが残っていればその下に必ず王がいることがわかります。

修復の前は内部に蝙蝠が住みつき、その排泄物が壁面の表面を被っている状況でした。また、人為的な破壊もありました。特に王の顔の部分を切り取り、剥ぎとって持っていくということが4か所ほどで行われ、うち2か所のものがパリのルーヴル美術館で展示されております。王墓のE室の、向かって右側の部分がルーヴルに所蔵・展示されています。

王墓の壁画は、私たちのクリーニング調査が終わっているのですが、当初の色が濃く出ていますが、ルーヴルの壁画の色はクリーニング前なので少し色が違います。エジプト政府は返還も考えていますが、返還して



E室南壁 壁画。剥ぎ取られた箇所を確認できる

も色の違いや他の問題があるので、オリジナルはこうだったというのを別の形で示すことになるでしょう。

ほかにも、岩盤の亀裂が非常に深刻で、表面のクリーニングだけでは崩れる可能性が高いため、岩盤工学の専門家と共に亀裂の修復に関する調査をいくつか併せて行いました。

そこでユネスコ日本信託基金の資金を使い、ユネスコのプロジェクトとして王墓の修復を始めました。ユネスコから来た最初の要望は、遺跡に看板を立ててくださいというもので、どういう内容を記載すべきかまで指令がありました。ここは観光客が通る場所なので、日本信託基金によりユネスコ・エジプト考古庁・早稲田大学による王墓の修復プロジェクトであるというのが見えるようになっています。



プロジェクトを説明する看板

同プロジェクトは2001年の3月に予備調査を始めました。ユネスコの予算管理というのはきちんとしているので、大枠で予算を申請することが出来ません。予備調査でいったいどのぐらいの資金でどのぐらいの人が必要かわからないため予算案を作るのが大変だということを伝え、パリに行って専門の人と少し話をしながら予算の立て方などを教えていただきました。

そして予備調査が終わり、2003年からいよいよ1期の調査を行いましたので、既に10年も経ちます。その後、引き続き2期の仕事を行いました。しばらくはさまざまな理由により仕事がすぐに出来ませんでした。2011年から去年の5月までの間に3期めの修復プロジェクトを実行することができました。まだ、王墓内部の柱の亀裂の修復など僅かな作業が残っていますが、エジプト政府からはこの修復された墓の一般公開をなるべく早くしたいという要望が、最初の予備調査の段階から言われています。

予備調査のことを簡単に申し上げますと、信託基金をもらった当初は、日本国内で壁面の修復に適した人

を探し、さまざまな意見を頂戴しましたが、最終的にイタリアの修復家と一緒に修復をいたしました。最終候補にはイタリアの2チームが残りましたが、共に働くことになったジョルジョ・カプリオッティさんは王妃の谷のネフェルトイリ（ネフェルタリ）王妃墓の修復をアメリカのゲティ保存科学研究所がやった際の作業メンバーの一人で、非常に経験があり、私たちと英語でもコミュニケーションが普通にとれるということから採用いたしました。最初の作業は、1ヶ月ほどでしたが、壁面の汚れがどんどん落ちていくのがわかり、大体どのぐらいの予算で何人使えば壁面の作業が終わるのかを予備調査の段階で把握することができました。ただ大規模な修復のためには、外側に大きなダクトを設置しないと内部の部分が非常に危険な状態になります。そこで、ダクトを設置して自家発電で動かしていました。

人材育成の観点から、第1フェーズの段階からイタリア人とエジプト人を使いました。エジプト政府考古庁（当時）からいろいろ推薦がありましたが、私たちは年寄ではなく、なるべく若い人にしてほしいという条件を出しました。要するにここで訓練した人たちがなるべくエジプト保存修復の核となっていくように、若い世代の経験の場にしたいと考えたからです。同じように日本からも若い大学院生レベルの人たちを連れて行き、この現場でトレーニングをしました。壁面をクリーニングすると、ルーヴル美術館で展示されている切り取られた部分と比較して色が大幅に違うことが分かるので、非常に成果は上がっているといえます。

王家の谷があるルクソールは気温が50度くらいに上昇する夏の期間を除いた時期にしか修復作業が出来ないため、時間をかけながら調査をしています。昨年も5月ぐらいまで実施しましたが、5月から温度が40度を超えるようになりますので、夏を除いた秋から春先にかけての調査です。

私たちが作業したI室は表面が非常にくすんだ状態で、蝙蝠のフンや人為的な破壊もありましたが、修復作業が終わり、美しい壁画が蘇りました。第1、第2フェーズで壁画のほとんどの部分の修復が終わりでしたが、大きな問題は天井の修復でした。天井の場合は上を見ながら表面の固定を行わなければいけないので、非常に作業がしづらく、天井部分ではプラスターが剥がれ落ちやすいために、プラスター面の固定がどうしても必要でした。柱には亀裂が入っており、単に表面だけをクリーニングしてもいつか柱が崩壊しま

す。そのため、柱の修復の方法や形式についてはまだ少し課題が残っています。

一昨年10月から第3フェーズになり、エジプトでは30年ほど続いたムバラク政権が失脚し、続く新しい大統領もまた失脚しましたが、ルクソールの作業は継続しており、私も今年の12月にはまたエジプトに発掘調査に行く予定です。この第3フェーズの目的として、壁画の保存修復作業の完了、柱亀裂箇所の補修、それから石棺の修復展示というのを目指しています。

すべての壁面に壁画があるわけではありません。この18王朝時代にはいくつかの限られた場所と最終的にJ室という棺が置かれた場所に宗教的に壁画が描かれています。ここでの補修作業ですが、非常に根気と時間がかかるということが問題点で、お金をたくさん投下しても1週間や2週間、地道なものの積み重ねでやはり数ヶ月、3ヶ月、半年、10ヶ月とかかりますので、時間を上手く使わなくてはなりません。そうしますと、修復の人たちは慣れないエジプトの地で半年以上生活することになりますので、なかなかタフな仕事です。

また、イタリア人の主任修復師によるトレーニングがこの壁面の修復作業の途中で段階々々で行われ、非常に能力が高く、技術を持った人が若いエジプト人に作業を見せながら、教えていきました。彼らエジプト人の多くが現在エジプト中にある遺跡の修復でチーフとして働いていますので、最初若い人たちに教育していくというプロジェクトは成功しているといえます。



夜の世界を描いた天井の修復現場
出典：早稲田大学エジプト学研究所

天井には一面星が描かれており、夜の世界を表しています。王墓の棺が置かれている墓というのは、太陽が西の空に沈んでから東に登る夜の世界を表していますが、天井の修復は壁面よりも非常に時間がかかり、首が痛くなる作業です。修復が完了する前に、実際に

どのような顔料が使われているかの分析調査も東京理科大学の中井先生のところの人たちと併せて行いました。

最後にご紹介するのは、この王墓にある石棺です。不思議なことに石棺の本体部分は破片すら出ていないので、おそらく古代において、石棺の本体は何者かにより墓外に出され、蓋だけがここに残っているのでしょう。王のミイラは東谷の別の王墓から発見されまして、現在はカイロの博物館にあるという状況です。

このバラバラになった石棺を全部図に描いて、字を書き写しました。裏面には羽のあるヌウト女神という天の女神が描かれています。そして、この蓋の修復の際、この裏の模様も見えるようにということで、台を高くして裏に鏡を置くことになりました。まずどういふ場所がくっつくか、クリーニングをしながら碑文の再チェックをしました。そして模様の描かれている内面部分もクリーニングをしながら、15年前に私などが取った図がちゃんと見えるかを再チェックし、一応どのぐらいの高さだと下の絵が綺麗に見えるかを検討しました。村にある鉄工所で枠を特注し、その枠を下に入れてその上に蓋を乗せるということを行いました。



鏡を下に配置し、石棺に描かれた絵が見えるように展示

これは赤色花崗岩製で非常に重いものなので、狭い中滑車を使いながら、かつて石棺が置かれた場所に設置をする作業を進めました。現在はこのように石の下にガラスがあり、鏡で反射して見えるようになっているので、裏側にある神の図像とか碑文を普通の位置で見ることができます。近い将来、一般の観光客などにオープンした際に、訪問された方に見えるようにという考えに基づいています。鏡に映った像には、有翼のヌウト女神が描かれておりますね。そのほか、最終的な壁面の調査が終わった段階で、プロのカメラマンに壁面の細部の撮影を頼み、撮影を行い、これを出版

する、という手順になっております。

亀裂の問題はまだ少し残っておりますが、実は近い将来にきちとした形で修復作業が完了することになっています。現在はバンドを作り、壁面、柱が倒壊しないようになっておりますが、近い将来これをきちとした形で修復し、作業が完了します。

駆け足でご説明してまいりました。この遺跡のほかにも、例えば日本政府の援助で王家の谷にはビクターズセンターなどが作られております。この王墓は先程ご覧いただいたように、王家の谷の中にある王墓の中では壁画の質・量ともにおそらく1、2を争うきちとしたお墓なので、近い将来修復後の王墓やお墓の周りの環境整備とともに日本から観光に来た方々にも見ていただけるようになるかと思えます。ありがとうございました。

講演4

シルクロード沿いにあるバーミヤン遺跡の保存の現状

前田 耕作

(文化遺産国際協力コンソーシアム副会長/和光大学名誉教授)

ご紹介に預かりました前田です。今回は外務省国際文化交流室の大変なご支援によって、3年ぶりにアフガニスタンに足を踏み入れることができました。長い間安全の確保が非常に問題であるということで、入れませんでした。

バーミヤンのいまの姿を動画で少し見ていただきながら現状をご説明いたします。玄奘三蔵が歩いたままの道に沿って西の端からご覧いただきます。未発掘であります、王城の跡ということになっているところが広場になっています。さらに進むと55メートルの西の大仏の仏龕が見えます。磨崖に沿って進むと、一番端に東の大仏があります。その大仏の磨崖から谷を上がると台地があり、ご覧のジャガイモ畑があります。子供たちが大きなジャガイモを掘った後に、焚火をたい焼き芋にするための小さなジャガイモを拾う、のどかな風景です。ここにはこれまで私たちが調査の拠点としてきました日本ユネスコ協会連盟の建てた宿舎もあります。しかしそのそばには2001年以来ずっと放置されている戦車の残骸がいくつかあり、大きな重機がなく動かせないので子供たちの遊び場になっています。その風景の後方にはバーミヤンにある有名なイスラームの遺跡、シャフリ・ゴルゴラの丘が見えます。子供たちが遊び戯れ、ヤギが日陰を求めて戦車の影にしゃがみこむといったのんびりとした風景が展開しておりました。

バーミヤンの東の大仏にはドイツ隊が大仏の足を煉瓦でがっちりと作り上げようとしています。驚くべき足で、私たちはいかにもドイツ隊の仕事だなと思えました。戦前のノイエ・ザッハリヒカイトという表現運動の彫刻を見るような感じでした。どうしてこういう足になったのか、後でまたご説明いたします。材料には煉瓦やセメントが主材料として使われていますが、足の輪郭のみがわずかに昔の痕跡をとどめています。内部は鉄筋コンクリートで固められております。

私たちが現地に行ったのはちょうど10月の収穫時でした。戦後、もとは何もなかったバーミヤン川沿いに移された新しいバザールでは、この地域の産物とし

て有名なジャガイモとリンゴなどが山積みされ、売られていました。

さて本日は「シルクロード沿いにあるバーミヤン遺跡の保存の現状」という題で発表いたします。現在、広大な範囲に散らばるシルクロードの遺跡、とりわけ天山山脈の南北にある中央アジアと中国の主要な遺跡が世界遺産として包括的に登録されようとしています。バーミヤンもやがてほかのアフガニスタンの豊かな諸遺跡とともにシルクロード遺跡の一部として登場すると思われ、「シルクロード沿いにある」と申しました。



バーミヤン谷を示した地図
出典：東京文化財研究所(2010)『バーミヤン遺跡の地下探査—第1次および第2次ミッションの成果—』

アフガニスタンの全体地図を見ると、中央に大きな黒い影が伸びてきています。これはパミールからヒンドゥクシュへと連なる巨大な山脈で、バーミヤンはその山並みの真ん中にあります。バーミヤンは標高2500メートルに位置します。時代が下り3～4世紀頃になると、次第にバーミヤンを通る交通路が開けてきました。バーミヤン王国の絶頂期は玄奘法師が訪れた7世紀頃でした。王国最盛期に近隣に聞こえた名勝は東西2体の大仏でした。バーミヤンは現在では州名ともなり、広い範囲を一括する呼称となっていますが、バーミヤン遺跡といわれているのは、地図上で示された円の部分だけで、2体の大仏はこのバーミヤ

ン谷にあります。

バーミヤン遺跡と総称するときは、バーミヤン谷を含む3つの谷に位置する遺跡を指しています。大仏のある南面の磨崖と相対する位置にあるバーバー山から流れ出す水を西方で併せ飲み下る谷川沿いの地域をフォーラーディー谷と呼び、そこにも仏教遺跡が存在しています。もう1つは同じバーバー山の東方から湧き出る流れの川沿いに形成された地域をカクラク谷と呼び、その磨崖にもまた立仏を擁する仏教遺跡があります。したがってバーミヤン遺跡とはこれら2つの仏教遺跡をもふくめた総称なのであります。

先日NHKで報道された石造八角の仏堂は、大仏のあるバーミヤン谷の西方に位置するフォーラーディー谷の入り口で今回私たちが新しく発見したものです。報道ではバーミヤンで発見されたと伝えられますが、総称としては間違いありませんが、実際はフォーラーディーであったということをご確認いただきたいと思えます。

それから、もう1つ地図上に○で大きく囲んでありますが、シャフリ・ゴルゴラで、子供達が遊んでいた戦車の風景の彼方に見えたあの丘です。玄奘は旅の主なる道程をほとんど正確に『大唐西域記』に記述されていますが、このシャフリ・ゴルゴラの丘だけは残念ながら触れられていません。なぜ記述から漏れているのかというのは、バーミヤンの歴史を考えるうえでとても大事なことです。

今日シャフリ・ゴルゴラに残っているもっとも新しい遺跡はイスラームの遺跡です。おそらく9世紀末から13世紀くらいにかけて建てられたものが遺跡として残っているので、それらを総称してイスラーム遺跡と呼んでいます。ただし、かつてこの遺跡を京都大学が調べた時、現在のイスラームの物見塔といわれているその基礎の部分に仏教時代の石積み認められるとっておりますから、おそらく仏教時代にもなんらかの遺跡が存在していたと思われれます。現在イタリアの信託基金により、改めてこれらのイスラーム遺跡の保存活動が始まっています。しかし、現在のイスラーム遺跡を保存する一方、その奥に位置し、地上に見える古い遺跡の部分がどのような歴史的遺跡であるかという調査はこれからの課題として残されています。

破壊前の大仏の写真です。さきほどラオさんの講演でも出ていたのが55メートルの西大仏です。石澤先生の講演にあったアンコールの5つの塔の真ん中の

須弥山が66メートルなので、それより10メートルくらい低いだけです。1体の大仏でこの大きさですから、像としていかに巨大なものかということが想像できるかと思えます。東の大仏は38メートルで、世界遺産の奈良の薬師寺の修理中である東塔が水災の先まで33メートルですから、ほぼ同じくらいの高さです。東西の大仏の龕壁には、龕頂にも側壁にもすばらしい壁画がたくさん残っておりました。

大仏の爆破日については諸説ありますが、おそらくその後の9月11日にあったニューヨークの貿易センターのツイン・ビルの爆破テロと日にちを合わせたであろうと多くの人々が推察しているため、ここではあえて3月11日としておきます。爆破時の映像を見ても大仏が数度にわたって、しかも爆薬を変えて実行されたことがわかります。

爆破された後の西と東の大仏の写真です。西と東はこの仏龕の形の違いでわかります。仏龕は両仏とも三葉形ですが、東の仏龕は肩の部分の削り込みが浅いのがわかります。それに対し、西大仏は均整のとれた深



破壊前の西(左)と東(右)の大仏
出典：ICOMOS(2009) *The Giant Buddhas of Bamyan - Safeguarding the Remains*



破壊後の西(左)と東(右)の大仏
出典：東京文化財研究所

い削りであることが分かります。この仏龕の造形の差異によって、東西の大仏の造像の時代の前後に論及する人もいました。

皆さんに注目してほしいのは、破壊された東西の仏龕の下前方に網が張られ、そこに看板を立てられていることです。これは私たちがバーミヤンで行った遺跡保護活動の最初の一步を印すものです。

次に、2つの大仏だけが破壊されたのではないということをご記憶いただきたい。さきほど申しましたカクラク谷にある仏教遺跡にも8メートルほどの大きな、立仏が残っていたわけですが、これも同じように爆破されました。したがって、3月11日を中心に行われたバーミヤンでの文化破壊は、大きな大仏だけに留まっていたのではなく、意図的かつ徹底的に行われたというもう1つの大きな証拠でもあります。



カクラク谷の立仏 破壊前と破壊後
出典：尾高鮮之助撮影（左）／東京文化財研究所（右）

壁画も剥ぎとられ、多くの石窟には壁画の破片でできた山がたくさん残されていました。私たちの仕事として、石窟作業班はこの壁片を収集し、石窟内を清掃することから始めました。現場には石窟を剥ぎとった道具と思われるものも残されていました。

1969年に名古屋大学隊がこの石窟の調査に行った際、私たちが目にした供養天の写真がこれです。合掌した供養天の横には仏陀の座像が描かれていました。2003年、大仏爆破の後に行った時にご覧のように供養天の顔の一部は消去されていました。私たちはいま、この残っている部分をいかに現状のまま保存しようかという課題を背負いながらこの壁面に向き合っています。ただ、ここで大きな発見がありました。この壁画の顔料の分析をはじめ手掛けたのですが、この分析によりこの石窟の壁画が実は油絵の技法で描かれているということが判明したのです。このニュースはヨーロッパで大きな反響を呼び起こしまし

た。なぜなら、ヨーロッパにおける油絵の起源は大体12世紀頃という風に考えられてきたからです。バーミヤンですでに7世紀ごろ油絵の技法が駆使されていたということにヨーロッパは衝撃を受けたのです。ただ、バーミヤンから油絵の技法が始まったとは思えません。おそらくどこかに周辺の地域に起源があったに違いないと思います。フォーラーディー谷の仏教石窟の仏画もほぼ全面的にここで使われた油絵の技法で描かれております。壁画下地の分析や顔料分析の技術の進歩も相まって、これからもさまざまな発見が続くでしょう。



天人の壁画は1969年（左）と比較すると
2003年（右）にはこのように破壊されていた

この仏像破壊が始まった前後の同時期に、アフガニスタンの有する多くの文化遺産が略奪され、国外に流出していることも明らかになりました。バーミヤンからも多くの文化財がわが国をはじめとするアジア、またヨーロッパにも流出しました。スイスのブーベンドルフ（Bubendorf）にある亡命美術館はそれらの不正流出した文化財を収集し、かつ流出防止のキャンペーンを行いました。日本やアジアには、パキスタンを経由し流れてきました。すぐにアフガニスタン関係の諸物を扱っている骨董屋さんから知らせがあり、日本でも急速その流出文化財を難民と考え、それらを保護するために流出文化財保護日本委員会を形成しました。文化財がこれ以上いろいろな人の所に渡り行方不明にならないよう、またそれが第2次の破壊を被らないように日本で流出を止めるための活動を開始したのです。現在それらは東京芸術大学と平山郁夫シルクロード美術館に收容されているとのこと。100点を超えるそれらの収集品は現在修復を終え、母国への帰還の日を待っています。どのように、いつ、どういう費用で返すのか、新たな課題を私たちは現在背負っています。

2002年5月、バーミヤン遺跡保全のための日本信託基金をユネスコへ拠出すると日本政府は表明しました。その表明を受け、2002年9月にユネスコと日本の合同調査員による現地調査を行いました。今日ここにおられる龍谷大学の宮治昭先生、東京文化財研究所の山内和也さん、そして私の3人が日本の代表としてこの委員会に加わり、最初の被害地、被害状況の調査のため現地に赴きました。まず、現状をそのまま保全し、誰も手をつけずに守ることをしました。一瞬の保護を決断し、金網を張り、看板を立てました。といいますのは、当時パキスタンの有名な新聞『ドーン』紙に、バーミヤンの大仏の破片がトラックでたくさん現場から持ち出されているという記事があったためです。ベルリンの壁のように破片を売買の対象にするつもりであるという内容の記事でした。そのためここから1片たりとも破片を持ち出させないため、先に映像でお見せしたように、網を張り、看板を立てました。

看板には英語と現地のダリー語で文章を書き、ユネスコのマークを入れました。「この特別に重要な国の記念物は、ユネスコと日本政府とアフガニスタン情報文化省によって保護修復されます。落石に注意。立ち入り禁止」と。落石に注意というのは、破壊されたばかりですから、いつどういものが落下してきても不思議ではなかったからです。

しかし後でより重大なことに気づかされます。あの仏龕の下には実は対戦車地雷が埋まっていたということ私たちがその当時は気がついていませんでした。対戦車地雷の上に立って何度も仏龕を仰ぎ眺めたことを、いまぞっとする気持ちで思い起こしていますが、そこにもこの立て看板を立てました。これが私たちのバーミヤン遺跡修復の第1歩でした。

2003年7月、この予備調査が終わってから遺跡の保護・保存活動を私たちは開始し、同時に住民たちからも意見聴取しました。「大仏破壊をどう思いますか。私たちはこれから保存を開始しますが、どういうご意見ですか」ということを聞きました。バーミヤンはイスラーム地域です。信仰厚いシーア派の人々にとって、タリバンが宗教的な目的を含みながら大仏を爆破してもなお、私たちが仏教遺跡を通じてもう1度復興につなげようとしている行為に対してどのような思いを抱いているのかをまずもって聴取する必要があったからです。

その次に、今度はユネスコが戦略的行動にでて、バー

ミヤン遺跡を世界遺産に認定すると同時にまだ依然として危機的状態を脱しない遺跡として危機遺産登録をしてくれました。そのことにより、バーミヤンの住民たちも世界遺産として指定されたならば、と大きく胸襟を開いてくれたように思います。これはある意味では戦略的行動による1つの大きな成果であり、私たちはそれを発条としてより積極的な活動を開始することになりました。

そして各国がどのように、どのような手法でバーミヤン遺跡に取り組むのかを、ユネスコが主催するパリ国際調停会議で熱い議論をしました。それぞれの得意分野を挙手するという形でやりましたが、なかなか激しい議論が交わされ、その結果、イタリアは地質学的な調査と大仏の補強を受け持つことになりました。大仏龕とは大仏を納めていたいわば磨崖に彫られた岩のお厨子のことで、まずその補強をしなければいけません。それからドイツは、先程私たちが金網の中に閉じ込めた大仏の破片をすべて収集すると同時に、大仏の足下に彫られたたくさんのお堂の補強を引き受けました。

日本隊は、現在バーミヤン遺跡と書かれている磨崖だけでも720もある石窟の整理・補強を担当しました。石窟の中には壁画の断片を残しているものと残していないものがあります。それを区別しながら、日本部隊は壁画と石窟の現状調査をし、壁画の保全と壁画片の収集、それから埋蔵文化財の調査を引き受けました。

まず、遺跡のコアの部分を確定することができないので、玄奘が指摘した王城の跡がどこかをきっちり決めなければなりません。もう1つの大きな問題で現在も引き続き課題なのが、玄奘の言った「千百尺」の釈迦の涅槃像はどこに存在したのかということです。そのことを確定したいと願いました。しかしなお、考古学的活動を私たちが本格的にする前にいろいろ成すべきことがあり、これら2点の課題は今後も未来の課題として残され続けているというのが現状です。

ここにご覧いただくのはイタリア隊の磨崖修復の現場です。アルプスでトンネル工事をしてきたエキスパートたちがここに参加してくれました。このように空中ブランコの状態でアンカーを打ちこみ、ステンレスの15メートルのパイプを何本もここに打ち込み、磨崖が剥がれて谷側に落ちないように作業を続けました。なかなか困難な作業だったと思います。ロープで留めながら下りてくる場面です。

これはドイツ隊の仕事現場です。この写真には大仏の下方の衣の部分が転がっている様子が写っています。この大きな石も含め全ての断片を仏龕の外へ運び出す、という非常に大きな作業をしているため、重機が要ります。私たちは重機の調達はできませんが、ドイツは北方のクンドウズにドイツ軍が駐留しているためそれを活用することができました。この取り出しの過程で、土中からたくさんの不発弾を発見し、私たちは土砂の除去がそれほど簡単な仕事ではないということを知られました。写真のように西の大仏の左足部分がはっきりと残っていることがわかります。まだ形を残していると思います。

これは日本隊の壁画保存作業です。石窟内の壁画の残っている部分の洗浄作業をしております。アジャンターや近藤二郎先生がエジプトで対応されたようなコウモリの糞による被害は、ここにはありません。ただ外に窓が開いているため、ハトやイワツバメがたくさん出入りします。そのため、壁画を保存するために洗浄し、剥落を止めた後で、入り口を塞ぐということが



左：仏龕の補強に取り組むイタリア隊
右：土中から現われた西大仏の左足
出典：ICOMOS (2009)



ド破壊された大仏破片の収集
出典：ICOMOS (2009)

1つの大きな課題として私たちに差し出されたわけです。今年この石窟に付けた入り口を3年ぶりに開きました。まったく変化がなかったことから、この扉を付けたことが後に問題を残す行為ではなかったということ裏付けることができました。



日本隊による壁画保存作業の様子
出典：東京文化財研究所

イタリアの専門家とも共同作業をしました。壁画の一番縁のところを止めました。このエッジング作業は命綱をつけての作業です。下は断崖絶壁ですから、この命綱なしにはエッジングはできません。このような作業が石窟保存につきまともっとも難しいところで、危険をとまなうところでもあります。

アフガニスタンの人々にも当然参加していただかなければいけないので、まず石窟の中にある残存物で余分なものを除去するという基礎的な作業を受け持ってもらいました。また、カブール国立博物館に所属するアフガニスタンの修復専門家とも作業を行いました。この写真は今度新たに剥ぎとられた壁画を修復している場面で、アフガニスタンの専門家の一人が切り取られた壁画の部分がそれ以上進まないように補てんし、エッジングして止めています。この人々が私たちと一緒に仕事をするのが一番良いのですが、彼らがカブールに戻るとこの保存事業は持続できません。したがって、より若い、しかも地元バーミヤンの若者の参加を呼び掛けることが私たちの事業にとってきわめて重要だということを感じさせられました。次世代に確実に保存の考え方や技術を引き渡す人材育成が早急に実施されなければ、これだけの大遺跡を持続的に保存することは難しいでしょう。

いろいろな仕事が終わった後、最後に考古学隊が雪の中で発掘を始めてくれました。つるはしを1発入れると、つるはしの柄が何本も折れるほどの冷たさでしたが、地層を掘り下げる作業を実施してくれました。

私たちの支援活動は2003年から始まり、今年が2013年なので、エジプトと同じように10年の長さで実施してきました。いくつかのポイントと問題点を挙げながらバーミヤンの現状を説明します。

1つはこの10年間、バーミヤンにおいて何らの争乱もなく、危惧されたテロ行為といったものもなかったことから、この場所においては平和が確実に定着しつつあるということが実感できることです。

もう1つは、その平和の定着と関連して、国際的な支援活動も非常に活発化し、多様化し、かつ恒常化してきたということです。バーミヤン以外のところではなかなか活動ができないため、多くの資金がこの場所につぎ込まれているという事情もあると思います。

そしてその結果生まれてきたことがあります。教育がかなり徹底的に普及し、学校が多く新設されました。ところが、バーミヤンのような山深いところでは学校へ通えない距離にある村がたくさん存在するため、それらの地域には日本のNGOが寺子屋活動を通して教育の普及に励んでいます。またバーミヤン大学が新設され、若者が高等教育を受ける機会も増えました。この人々のうち幾人かがきっと将来のバーミヤンの遺跡保存で大きな中核的な仕事をしてくれるだろうと期待



アフガニスタン人の修復専門家によるエッジング作業
出典：東京文化財研究所



壁画を守るために設置された扉
出典：東京文化財研究所

しています。ただ、学校の新設といっても寺子屋と学校の間くらいのものもたくさんあります。私たちが新たに考古学的な活動、保護活動に着手しようとしているフォーラーディー谷にもそのような学校がありました。ちょうど谷の真ん中に位置するユニセフから寄贈された2枚のテントだけでできた小学校です。そういう学校がたくさんあるということも私たちは記憶にとどめなければいけません。

いままでの話は遺跡の谷でした。一方、谷を上ったところにある台地の上では、バーミヤンの主要な交通網の1つである空港が設置されており、その空港の北側では土地開発が進んでいます。かつてニュージールランド軍が駐留していたところに、アフガニスタンの新しい国軍がそのまま駐留しておりますが、その背後には新築の市庁舎の群があります。そこを貫流する主要道路は日本政府の支援によって建設されました。実に真新しい、素晴らしい舗装道路が走っております。

同時に、いまバーミヤンは平和が定着しつつあることから、毎年観光客数が増加しています。アフガニスタン人だけではなく、とくにヨーロッパから多くの人々が訪れています。したがって観光客を収容する施設も求められ、ホテルがあちこちに建設され始めました。ラオさんが先刻指摘されたように開発の進展に伴い、遺跡とそのバッファゾーン（緩衝地帯）をどのように調和をもって保全するのが、直近の課題としても上がっています。

観光客の迎え入れと石窟の保全・整備のバランスに応えるために、私たちは東大仏を中心として観光客に上がって下りてもらうコースだけはまずきちっと保全することを決めました。同時に、バーミヤンのさまざまなイスラム遺跡の保全事業も開始することが確認されました。



東大仏の観光ルート
出典：東京文化財研究所

東大仏には古代からD1、D、C窟からBやAに降りる巡礼道が設置されています。このように左から上がり大仏の後ろを右回りで巡り右から降りる礼贊の形式を右行道といいます。この道はインド隊によって1960年代から70年代にかけての修復工事のうちに改修されたもので、これを観光道として確保・活用することにし、現在はその途中にある石窟の壁画を保全するための作業を急いでおります。

最後に19世紀に描かれた東の大仏をご覧ください。この描かれた大仏には非常に重要なことがあり、腰部分を見ると帯のように割れています。玄奘が実見した時はおそらくこの上に金箔が貼られていたのか、または金泥が塗られていたのか、黄金で輝いていたといわれています。しかも、身体を分けてそれぞれに別鑄で、玄奘の言葉によると真鍮で上と下を分けて鑄造されたものだと書いてあります。もちろんこれは玄奘さんのまったくの誤認です。分身別鑄と玄奘に言わしめた帯が写真でお分かりになるでしょうか。私たちも大仏が爆破された後にこの岩質を調べてもらい、上下に違いがあるのかを確認しました。この帯があったところはほかの部分とは岩質の異なるシストと呼ばれる弱い岩層であったと思われます。

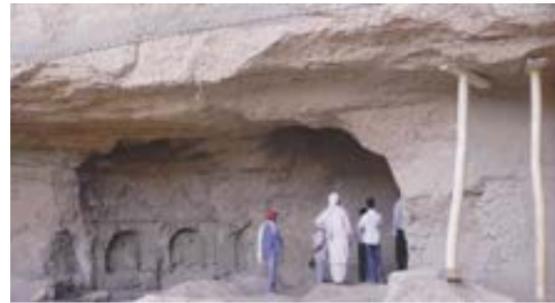
重要なことは、ご覧のとおり、東の大仏には良い形ではありませんが足がこのように残っていたことです。こちらの画面は、1968年から1978年まで10年をかけて、ユネスコの基金によりインド隊が修復した東大仏の足部です。実に見事に作られているこの足は、実際はかなり想像的に復元されたものです。ではなぜこのような想像的な復元の足を作ったのでしょうか。

東大仏の足下には8つの仏堂がありますが、これら



左:19世紀に描かれた東大仏。「分身別鑄」と玄奘は記述していた。
右:インド隊が修復した東大仏(1983/1984年)
出典:ICOMOS(2009)

のうち主要な仏堂も爆破されました。非常に不思議なことですが、この部分になぜか支え木が立てられています。もちろんこんな支柱で上からのしかかる岩の重みを支えることなどできそうもありません。



破壊された東大仏足下の石窟
出典:ICOMOS(2009)

中心的な仏堂の半分以上が爆破されたので、そこをまずきちんと固めなければ前の部分の保全はできないと判断されました。私たちの調査でもこの仏堂の仏龕の角を計測し確認しているのが、これが八角堂だということがわかります。天井はラテルネンデッケ(井桁持ち送り)で井桁組み上げ天井ともいいます。この天井は爆破でほとんど飛んでしまったので、岩層の一部が剥離しかけています。安全を確保するため、コンクリートの厚い壁を仏堂内に作らざるを得ないという判断がなされました。

20世紀初期に描かれた絵図にはまだ仏足が見えますが、1920年代にフランス考古学隊が訪れた時にはすでに足の部分はかなり崩落していたため、煉瓦を側面に積みこんで補強しました。そのあと今度はインド隊がフランス隊による補強部分をいったん取り外し、足の基部に鉄筋を打ち込んだ上で、改めて足の膏の部分原型に近づける復元作業をしました。しかしそれほどまでも想像復元であって真正性には疑問を残すものでした。大仏の衣の下部に残されている小穴は、そこに小石を詰め込み、その上に下地の泥土を載せ、ついでその上にさらに化粧をするための土を留めるためのものでした。

ところが西の大仏は違い、石の代わりに木杭を入れ、木杭と木杭を植物繊維を撚り合わせた綱で繋ぎ、その上に泥土と化粧土を載せていく仕方をとっています。東と西では大仏の造られた時代も工匠・工房も違っていたのでしょうか。西大仏の崩壊した土中からは膨大な木杭が収集されました。

2013年、私たちが久しぶりにバーミヤンに行くと、東大仏の足下は大きなシートで被れていました。何

だろうと中に入りましたら、中心の仏堂(第4堂と第5堂)の前に2本の足が作られていました。まだ建造途中ですが、この足は非常に大きな問題ですね。そもそも東大仏の元の足がどのようなものであったのか、考古学的な検証はまだなされておりません。ドイツ隊はその検証の過程をかならずしも国際的な同意を求める形で公表していません。ラオさんも今日指摘なされたオーセンティシティ(真正性)やインテグリティ(完全性)についてもう一度考えなおさなければなりません。インテグリティという言葉はもともと潔白であると同時に誠実であるという意味のラテン語のintegritasという言葉に由来します。インテグリティという言葉はその意味において、歴史性に誠実でなければいけないということでもあります。だとすると、この足は、まさにそのオーセンティシティやインテグリティをはるかに超えた、まったく新しい足といわざるを得ません。ドイツ・ミュンヘン隊によって造形されたこの足は、文字通りheavy footprint、つまり世界遺産への重い介入といわなければなりません。

本来は、私たちと共に、歴史を知る者、図像学に精通する者や仏教考古学などの知見を豊かに有する者を結集し、失われた仏足をどうするのかという議論をしなければ、もっとも近似的な足の表現に到達することはできません。そのために私たちは、大きな議論や国際的な合意、協力の各プロセスの中で、ディスカッションを多くし、多様な意見を入れて、最良の答えを出さなければいけません。単なる技術的な可能性からこのような足の設置に踏み切れることは、どこかで常にみずからに課すべき倫理の枠組みを踏み外しているということであり、1つの大きな反省材料として皆さんに示しました。

この仏足の造型が正しいかどうかはこれから国際会



ドイツ隊によって作られた足
出典:ドイツICOMOS国内委員会(nd) <http://www.icomos.de/01scripts/01files/177c932622825bb.pdf>

議にかけられると思いますが、世界遺産にこういう修復があってはなりません。そうすると私たちが壁画片を拾い集め、分析をかけ、地道な修復を続けている行為は一体何のためなのか、改めて自分たちに向けて問い直さなければならない時期が来ているのかもしれない。

大仏の足の横にはインド隊の作った大仏の支柱があります。インド隊は、上からの圧力に耐える鉄筋コンクリートの支柱を1本立てました。ドイツ隊は残存する大仏の後壁から落下する石片を受け止める屋根を支える支柱(pillar)だと主張していますが、それなら誰が見ても足と判る建造物は撤去し、支柱に変えるべきです。すべての修復が終われば支柱を外せば良いので、それを足で支えるというのはやはり行き過ぎた行為というべきでしょう。

私たちの活動を次世代にどうやって渡すのかという課題があります。現在、私たちの活動報告をバーミヤンの人々に伝えています。バーミヤンの教育の普及とともに、次世代も大きく変わりつつあるという1つの証拠が、女性の登場です。私が石窟を訪れたおり、女性がノートをもってきて、いろいろな事情を聞いてきました。これはかつてなかった経験です。バーミヤンに教育が普及し、大学が設置されていることの意味が、少しずつかつ確実に具体化しつつあると感じました。

私たちはアフガニスタンの人々とともにバーミヤンの未来構想を描いています。その1つがバーミヤンに平和博物館を建設することです。崖の下にバーミヤンの谷があり、大仏が立っており、そこに向かってバーミヤンの平和博物館を建設したいと考えています。

平和博物館の向こう側には前述したジャガイモ畑があり、その向こう側は大官庁街で、都市化が進んでいます。都市化の部分と、保存の谷の部分との接点がこの崖の淵です。かつて現在の天皇、皇后両陛下が、



バーミヤン平和博物館の構想
出典:武庫川女子大学 岡崎甚幸教授提供

パネルディスカッション

皇太子、皇太子妃殿下であられた時に、バーミヤンに
来られた際、ここに佇まれながら大仏をご覧になった
場所でもあります。そこを、バーミヤンの文化を象徴
し、その文化を継承する次世代の人材育成の場にした
いのです。遺跡保存活動を包括するような場所にした
いのです。そのためには、コミュニティー機能も発揮
できる平和博物館のアイデアがもっとも適切であろ
うということで、2012年の12月、私たちはドイツ
のアーヘン工科大学で開催されたバーミヤン専門家会
議で、日本のパイロット・プランを提示しました。こ
れが本当に実現していくにはどうすれば良いか、皆さ
んの支援と智恵を是非ともお借りしたいと願っており
ます。

ありがとうございました。

司会

関 雄二

(国立民族学博物館研究戦略センター教授)

パネリスト

キショー・ラオ

(ユネスコ世界遺産センター長)

石澤 良昭

(上智大学前学長)

寺崎 秀一郎

(早稲田大学文学学術院教授)

近藤 二郎

(早稲田大学文学学術院教授)

前田 耕作

(和光大学名誉教授)

■ パネルディスカッション

世界遺産の未来—国際協力として我が国に何ができるのか

司会者： **関雄二**（国立民族学博物館研究戦略センター教授）

パネリスト： **キショー・ラオ**（ユネスコ世界遺産センター長）
石澤良昭（上智大学前学長）
寺崎秀一郎（早稲田大学文学学術院教授）
近藤二郎（早稲田大学文学学術院教授）
前田耕作（和光大学名誉教授）

関 今回のパネルディスカッションは、「世界遺産の未来—国際協力として我が国に何ができるか」というテーマで進めます。シンポジウムの前半では、パネリストの方々に代表的な世界遺産の遺跡における国際協力の実態を伝えて頂きました。それ以外にもさまざまな活動が行われていると思いますので、日本の国際協力の特徴がどのようなものかを抑えた上で、将来的に日本が進むべき方向性に関する具体的な議論に移っていきたいと思います。まず、日本の国際協力の強みを外から見た時の観点をキショー・ラオさんにお伺いします。

ラオ 関議長、ありがとうございます。本日は、日本が国際協力として世界各地で行っている技術的な支援に関して包括的な話がありました。エジプト、アジア、カンボジア、ホンジュラスなど、世界各地で日本は協力活動を行っています。今回のシンポジウムでも、それぞれの発表者からさまざまな形で行われる協力の実態について発表があったと思います。私の発表で触れましたが、国際社会の立場から見ると、日本の支援によるプロジェクトはそれを受ける側にとって貴重でありがたいものになっています。私の提案は、日本がこれまで培ってきた知見や経験をもとに将来的にも支援を提供し続け、プロジェクトを拡大し、ほかの遺跡にもその活動を広げていただきたいというものです。

近々に迫った問題や優先的に行うべきプロジェクトに関してお話すれば、世界遺産委員会でも議論されているように、自然災害や人的災害に見舞われ緊急対応が必要な遺跡も含め、危機遺跡リストに記載されている遺跡が多数存在します。国際協力の観点からすると、確かなプロセスをとる日本による支援は役に立ちます。特に緊急事態に対応する方法はさまざまですが、日本の国際協力プロジェクトを通じて、危機遺産への

対応を是非お願いしたいです。緊急対策において、事前に各国で能力構築のプログラムを形成することは重要です。たとえば災害リスクに備える訓練やそれらの問題に対応できる人材の育成があります。また国家の危機の際に対応できるような準備体制の構築や、地元的能力を育成し、彼らが緊急時に対応できるようにすることも重要です。

関 ラオさんには日本の強みを生かし、いままで踏み出したことのない国・地域を対象にした将来的な日本の協力姿勢を提言して頂きました。また各パネリストが発表されたような日本の知見あるいは技術、トレーニングシステムは、世界の多様な地域に適用させることができ、ユネスコ世界遺産委員会や世界遺産センターが危惧している危機的な状況における世界遺産の保全に役立つとご発言頂きました。

今回は、実際に国際協力に携わっている方々の立場から、日本の国際協力はほかと比較してどう異なるのか、あるいは日本の特色はどこにあるのかをお伺いします。

石澤 カンボジアのアンコール地域には現在 17 カ国のチーム・研究所などが入っていますが、その中でも日本には独特のやり方があると感じます。まず、基本的な姿勢として遺跡のある現地には日本人が学ぶべき知の遺産があり、私たちはそれに対して興味をもって接しているということが 1 つの特色です。2 番目に、国際協力は、研究または保存修復の仕事のみではなく、人と人との関係間での協力であります。私は日本とカンボジア双方の国についてクエスチョン・アンサーを通して確認をし、お互いの国に差異がないことを認識してもらい、クレディビリティを高めています。これにより人の心の繋がりのようなものが形成されている

ように感じます。3 番目に、修復技術や壁画の修復において現地の人たちの立場を尊重しながら、非常にアイデアに富んだトレーニングをしています。たとえば私の現場では 30 年の空白を経てカンボジア人の若手を育てるということになった時、テーマをカンボジアの方々に相談して決めます。そして日本の大学院で修士論文、ドクター論文を書かせる際に、1 年間の基礎単位を取得後、調査の方向性を伝え、1 年カンボジアに戻します。するとそれは世界で誰もやっていない研究・調査、プロダクトである場合があります。そういう点では、人の協力として相談し、興味をもってもらい、彼らの強みを上手く見つけ出してあげるようなことに集約されるのではないかと考えます。

関 私が調査している南米においても、そういう場面に遭遇することが多く、共感できました。他のパネリストの方で、日本の国際協力の特色について発言ございますか。

昨今、日本では社会階層がはっきりしてきたようにいわれていますが、一般にこうした上下関係の認識があまりないように思います。例えば現地の国際協力の現場で、現地の人々に指摘され気づく事が多いのですが、私たち日本人は比較的对等の目線で現地のコミュニティや技術者と接します。しかし、良い面と悪い面があると思いますが、欧米の人々は教師と生徒の立場のように明確に区別されているというのです。この点に関してご意見はございますか。

寺崎 私たちの現場でも、親しくすることの是非に関してさまざまな意見がありますが、日本の距離の取り方や人間関係のあり方は、恐らく先行したアメリカ人たちと非常に異なる部分があると思います。アメリカは大学の調査ということもあり、比較的短いシーズンで、特定の関係者ときわめて強い結びつきをもちますが、それ以外の人たちとはあまり強い関係性をもっていません。そういう点で日本人と一緒に働きたいという声は頻繁に耳にします。多分にリップサービスもあると思いますが、息の長い関係を続けていく上で非常に重要になってきます。治安の問題も含め現地の人から情報が得られるような関係作りが大事ではないかと思えます。

前田 今日の先生方の話を聞き、皆さん自分が仕事をしている現場を愛しておられると感じました。魂に響

く共感が無ければ、そういう感覚は生まれないと思います。対象地域は異なりますが、現地で日本人は必ずしも上下関係を意識しないなどという長所を挙げられるのは、対象を非常に愛しているというのが大きな原因ではないでしょうか。何よりも、日本の多様な領域における信頼の蓄積のようなものがどこかに存在し、それが現地に赴く際に、非常に有利に働いています。そのため私たちは現地においてその信用を背負っていくので、それを更に深め、広げたいという姿勢で臨むという形が信頼を得ているのではないのでしょうか。

近藤 欧米はすでに 200 年ほど前からエジプトに入り研究をしており、エジプト人との人間関係を築いてきています。そうした状況で日本人は後発で行き、そのシステムを学ぶところから始めることになります。

エジプト人との関係においては、少し上の年代では、親方と弟子のような徒弟制度の中で作業が進められていました。しかし、上下関係を引きずった中でトレーニングをするのではなく、なるべく若い、核となるような優秀な人をトレーニングしていきたいと考えています。また欧米人と日本人はまったく異なるので、日本人としてどうするのかを考えなければいけません。私はエジプトに行って 37 年になりますが、毎年エジプトに行き、現地の人と会って話を続けるというのが、信頼関係や人間関係を結んでいくために非常に重要な点であると思っています。

関 非常に重要なご指摘を先生方、ありがとうございます。これに関連して、少しテクニカルなことを伺います。微妙な点ではあると思いますが、日本の国際協力における具体的な保存の方針が存在するのでしょうか。たとえば、日本隊としては当時の建設手法を可能な限り使用する保存・修復をしているのか、あるいは日本として世界的に有名な最新の技術応用するような形で復元や保存をしていくのでしょうか。

寺崎 私たちの地域は石でできているものが中心ですが、かつて造られていた当時とほぼ同じ素材を使用しています。1200 から 1300 年前とほぼ同じで、石と石を積み上げていく際にセメントを少し混ぜるという形で進めています。

関 基本的には昔の人たちが使用していた素材をそのまま使いながら修復・保存をしているということ

しょうか。

寺崎 グアテマラ人の専門家の中には、その方法で現在まで千数百年残ってきているのだから、少量のセメントを使用すればもう少しだけはおつだらうという人もいます。それは一理あると考えています。その方法のメリットは、後で再発掘しようとする時に、それほどダメージを与えず取れるということです。

近藤 同様に、先ほどの壁画の修復の時に、日本の高松塚にも来ていた経験豊富なイタリアチームの故パウロ・モーロ氏と計画を立てた際、19世紀20世紀初頭の修復には石膏が頻繁に使用されており、クリーニングをすると新しく石膏を入れたところだけが取れないということがありました。そうした、かつてなかったものはなるべく使わないようにし、泥レンガや泥のプラスターなどをなるべく使用するようになっています。また、強い薬剤も一気に綺麗になるから良いのではなく、急な変化がないような形で修復するように考えています。

石澤 カンボジアの場合、傷んだレンガの取り換えや同じ寸法の新しいレンガを積み上げますが、その際100年後、200年後、また保存・修復すべき時のことを考え、今日積み上げたというマークをつけています。そして古いレンガと新しいレンガを区別して、インベントリーに残しています。

関 先生方、ありがとうございます。では次のテーマに移ります。いま、保存や日本の特徴に関して話してきましたが、パネリストの方々にどのような悩みがあるかをお聞かせください。保存は発掘と比較してもより資金がかかる事業です。たとえば日本の枠組みの中で、2国間では外務省の無償援助があります。無償援助の中でも文化無償や草の根文化無償があり、またJICAの技術支援という枠組みや国際交流基金による人的交流もあります。一方で、多国間としての日本信託基金や世界銀行などのさまざまな枠組みも存在します。そういう枠組みを利用する中で、日本だからこそ資金を出せる部分など、アイデアのようなものはありますか。

石澤 地下から出た274体の仏像をどうするかという問題が出た時に、日本の専門家はこれらの出てきた

仏像に大変感激しました。その後、1%クラブの資金でシアヌーク・イオン博物館が建設されたという経緯があります。イオンが全額出資し、その後カンボジア政府に寄贈し、カンボジア政府の管理下に渡したのです。

関 ありがとうございます。学生の方から「学生は文化遺産の協力保全に対して何ができるのか」、また一般の方々からも「一市民として何ができるだろうか」という質問がありました。公的資金に頼らず、今石澤先生がおっしゃったような民間の資金の枠組みに参加する方法を模索するのも1つの方法ではないかと思えます。

前田 先程の発表でも触れましたが、バーミヤンにはさまざまな資金が入ってきています。日本の資金が増大するのに伴い、「日本」の存在感は日増しに大きくなっています。遺跡周辺の道路建設に伴い、公園建設や空港の修理なども発生し、日本も出資しています。それぞれの建設目的を関連付けて進めれば、タックスペイヤーの立場から考えても有効にこれらの施設を使用できると思います。こういう点が文化遺産国際協力コンソーシアムで議論の展開点になっていくのが望ましいのですが、現場は必ずしもそうはいきません。これは行政の対応に関係するからです。「ここは遺跡と関係があるので相談させてほしい、そうしなければ遺跡の保存とのバランスは取れない」というやり取りをする必要があります。JICAやODAに関わる人、無償に関わる人たちと私たちが絶えず情報交換をしていれば、連携的な作業が効率的に進められるだろうと強く感じています。ただこれをコンソーシアムで議論すれば良いのではなく、それぞれの役所が各系列の中で結びつくような積極的な姿勢が生まれてこなければ進展はありません。ですから、創造的な仕事をするには、よりクリエイティブなものに変える必要があると痛感しています。

関 ありがとうございます。いまの話は資金の問題に関してでしたが、ラオさんにその点について伺いたいと思います。会場から「文化遺産の保護に多額の資金が必要だと思う。他国の資金援助なしに途上国が自立して文化遺産を保全するためにしている資金面でのシステム作りはあるのか」という質問がありました。途上国が多国間援助や国際援助基金のような方法を使用

できるか、または自立的に保護を行える特別なシステムは存在するのかということをお伺いします。

ラオ 発展途上国と呼ばれる国々が自立してやっていくことはスケールの大きな問題であり、難しいと考えています。資金は限られており、低所得国あるいは発展途上国が自国だけでさまざまな問題に対応するのは困難です。これは財政的な問題だけではなく技術的な問題も自分たちで対応しなければならないためです。そもそも協力やパートナーシップなくしては世界遺産条約は存在しえません。こうした枠組みが存在するのであれば、発展途上国はアドバンテージとして使うべきです。しかし、それにはすべての人々が責任を負わなければなりません。たとえばシリアのアレッポの復興は、1つの国では難しいでしょう。ユネスコであっても単独ですべてできるわけではありません。日本がユネスコに対して貢献している様に、ユネスコもパートナーシップを重要と考えています。さまざまな資金を活用して平等に行えるようなシステム作りが必要であり、また今後そうしたコーディネーションは更に重要になるでしょう。

関 ありがとうございます。今日は日本が直接国際協力の現場で何ができるかという点に話が集中していますが、一方、パネリストの方々やラオさんが指摘したように、多国間援助の枠組み形成の段階で日本が発言をする重要性も大きいと思います。そのため世界遺産の将来像を描く際に、2国間の協力体制の中に囚われないような枠組みに日本が参加し、その枠組みを推進・提言していく姿勢が必要なのではないかと伺います。いまの発言から受け止めることができました。

これを受けて次の将来像のテーマに移ります。ラオさんの本日の基調講演で触れられたユネスコ方針や、昨年11月の世界遺産条約採択40周年記念最終会合の際に採択された「京都ビジョン」の中で指摘されたように、世界遺産の周辺の住人やコミュニティーの具体的な参加が非常に大事です。この点についてご意見をお聞かせください。

今日のパネリストの方々の調査の現場では、現地の人やコミュニティーが保存に参加できるような仕組みを作っているように理解できましたが、遺跡の近くで暮らす人々がトレーニングを受けることもあるのでしょうか。コミュニティーのイメージを明確にするためにお伺いしたいと思います。

近藤 王墓の修復には、エジプトの修復の専門家の卵たちから選抜した人々が来ているため、王家の谷の周辺にいる人たちが必ずしも参加しているわけではありません。現地の人々が専門家の助手として雇われることはあります。そして王家の谷のある現在のテーベは、昔はクルナ村として知られたのですが、北のターリフという新しいクルナ市を作るために村自体が崩壊し、全員の移動が終わったところです。アメリカが行っている、新たに住居を移転した後のがれき処理を私たち日本も手伝っています。

またエジプト特有の問題もあります。世界遺産であるテーベのカルナック神殿にスフィンクス参道という名前のルクソール神殿とカルナック神殿を結ぶ3.5kmの参道があります。住民や住居などを全部強制的に排除し、新設しようとしたところ完成することができませんでした。その背景には、コプトというキリスト教の教会の存在や工事の中断、政権的な問題がありました。こうした地域の住民という点ではルクソールのテーベ地域は少し違う印象を受けます。

関 世界遺産の大きな問題点として、当初は誰もが世界遺産だと認めるものから始まったため、周辺住民のことを考慮してきませんでした。ところが実際始まると観光客が押し寄せ、乱開発が起こり、大きな問題となりました。そのため現在では周辺コミュニティーのことを考えなければいけない傾向にあると思います。私は人類学者なので、バッファゾーンの住民は排除するのではなく、組み込むような形のプロジェクトをできないものかと模索しています。その点で石澤先生、何か意見はございますか。

石澤 長くカンボジアで調査をしていると地域住民の協力は必要だということを痛感します。そこで4年前からHeritage Education（文化遺産教育）を始めました。8月に実施した発掘現場に地域の小学校4年生の子供たちを連れていきました。そこでカンボジア人の大学院生が「これは何だ」というクエスチョン・アンサーをはじめ、遺跡の説明をさせました。これが帰宅後、家族との会話の中で子どもたちの両親に伝わるというわけです。カンボジアでは小学5年生以降が働き手として農家の手伝いをするようになるため、学校への出席率の高い小学4年生を選びました。各地の小学4年生を連れてきてHeritage Educationを行っています。これを通して、子供たちは毎日の通学の中

で遺跡の間を通る際、不審者がいたら先生に伝えることがあるかもしれません。そうすることにより盗掘防止を含め、自分たちの祖先が作った遺跡の価値を理解するような意識の組み立てを願っております。

関 ありがとうございます。前田先生、どうぞ。

前田 イスラームを信奉するバーミヤンの場合、遺物は仏教なのです。そういう状況では Heritage Education が単純に進まないことが大きな課題であります。先程の発表でも触れたフォーラディー谷には仏教遺跡があり、そのコアの部分に小学校があります。場所柄その空間を使わざるを得ないのですが、ユニセフのテント1つからなる小学校では1年生から6年生が勉強をしています。さらに彼らにとっては異教の遺跡なので、そのように遺跡の中にいるという文化的な利点をいかに理解してもらうかは非常に大きな課題です。ただイスラーム以降ではなく、イスラーム以前の歴史に現在自分たちが住んでいることを認識し始めている若い層が生まれつつあります。そういう遺跡にいる人々と私たち間で接点を設定しないと、実際は Heritage Education が機能しません。現在その村の横に日本がアスファルトの道路を建設しました。この道路自体は美しいのですが、そこの脇にはユニセフのテントの教場があります。これらをつながりのあるものとして解決することが、彼らの思考をもう1つ豊かにしていくきっかけになるのではないかと考えています。このフォーラディーの教場を日本の手で、しかるべき教育の場そして、遺跡の理解の発祥の場として展開したいと考えています。

関 世界遺産を含め、文化遺産の大部分が抱える問題として1つに歴史の不連続性が挙げられます。征服や宗教の変換により現在の住人の考えに容易に入り込めず、化石化されたような遺産を対象に保護をしなければならないという問題があります。教条的に遺産の重要性を植え付けることも1つの方法かもしれませんが、私自身は現在の住民たちが遺跡との新しい関係を樹立していくことが大切だと思います。この関係の樹立のため、道路を含めた都市開発、観光開発を含む社会開発をバランスよく組み込んでいくべきなのでしょう。文化だけを特別扱いした形で資金調達をすることが困難な状況では、こうした姿勢が必要ではないかと思っています。世界遺産の未来、国際協力として我が

国に何ができるかということについてのパネルディスカッションをこれで終わります。パネリストの皆様、基調講演をして頂いたキショー・ラオ様、本日はありがとうございました。

後藤 健

(文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会長／(独)国立文化財機構東京国立博物館特任研究員)

閉会挨拶

後藤 健

(文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会長／
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館特任研究員)

本日は大荒れの天候の中、多数の皆様にご参加いただき、ありがとうございました。「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」に拠って、2006年に設立された文化遺産国際協力コンソーシアムは、今年で満7年を迎えました。年に1度開かれるこのシンポジウムも、回を重ねて、本日8回目です。

本日の講演、パネルディスカッションを聴講して、私は様々なことを考えました。文化遺産というものを守ることがいかに大切なものであるかのみならず、いかに難しいものであるかということです。それを持続的に可能とするのは地元住民の高い意識であり、それを共有する社会の力強い後押しだと思います。文化遺産とは限られた人のものではなく人類皆のものでありますから、人類全体で守っていかなければならないということあらためて感じています。

コンソーシアムは、それを達成するために、収集した全ての情報を公開しております。それらの多くは、このようなシンポジウムのほか、出版物やウェブサイト上で見ることができます。官民の機関、個人の誰でも、会員として新しい正確な情報に接し、またこのような催しに自由に参加できますように、私どもは情報の発信を続けます。

設置当初、本コンソーシアムには、運営委員会の下に、企画、東アジア・中央アジア、東南アジア、西アジアの4分科会が設けられていましたが、現在では欧州、アフリカ、中南米の3分科会が加わり、7分科会、8地域を対象とするようになりました。各分科会ではそれぞれの専門家が委員を委嘱されており、必要に応じて、調査研究や日本による国際協力事業への支援を行ってきました。

本日はご講演いただきました、ラオ先生をはじめとする講師の皆様、それからパネルディスカッションの司会・パネリストの皆様、本当にありがとうございました。ご来場いただきました皆様、ありがとうございました。

またお会いいたしましょう。

パネリスト・司会者紹介



キショー・ラオ (Kishore RAO)

ユネスコ世界遺産センター長
(Director, UNESCO World Heritage Centre)



1976年からインド環境森林省で森林・野生生物の保護等に従事後、1994年から国際自然保護連合(IUCN)南部アジア世界保護地域委員会副委員長を経て、1999年～2005年にはIUCNアジア地域生態系・生活グループ長としてアジア地域保護地区事業、アジア地域山岳事業及び中国事業の監督等に従事。またその間の2002年～2004年にはIUCN世界遺産パネルメンバーを兼任。2005年からユネスコ世界遺産センター副所長となり、センター全体の管理・事務業務に加え、特に自然遺産とその関係事業の調整に携わる。2011年3月より現職。過去30年以上にわたり、世界遺産条約の実施に関わる。母国インドにて森林学、米国にて天然資源政策・計画学の修士号を取得。



石澤良昭 (Yoshiaki ISHIZAWA)

文化遺産国際協力コンソーシアム会長 / 上智大学前学長
(Chairperson, JCIC-Heritage / Former President of Sophia University)

1982年より上智大学教授。文学博士。専門は、東南アジア史、文化遺産学研究。2005年～2011年上智大学学長。上智大学アジア人材養成研究センター所長、上智大学アンコール遺跡国際調査団団長、文部科学省文化審議会会長(2006年～2008年)を務める。「カンボジア人による、カンボジアのための、カンボジア文化遺産保存・修復」を掲げ、現地にアジア人材養成研究センターを建設。2001年にはバンテアイ・クデイ寺院において従来の学説を覆す274体の仏像を発掘。2003年国際交流基金賞、2007年カンボジア王国シハモニ国王陛下よりサハメトリ章(大十字勲章)親授。2012年瑞宝重光章叙勲。主な著書に、『アンコール・ワットへの道』(JTBパブリッシング、2009年)、『東南アジア多文明世界の発見』(講談社、2009年)、『新・古代カンボジア史』(風響社、2013年)など多数。



寺崎秀一郎 (Shuichiro TERASAKI)

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員 / 早稲田大学文学学術院教授
(Member of Latin America and Caribbean Subcommittee, JCIC-Heritage / Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

早稲田大学文学学術院教授。1999年早稲田大学文学研究科博士後期課程(考古学専攻)満期退学。1996年～1997年早稲田大学文学部助手、1998年早稲田大学會津八一記念博物館研究助手。2001年早稲田大学文学部専任講師、2004年助教授、2010年より現職。



近藤二郎 (Jiro KONDO)

文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会委員 / 早稲田大学文学学術院教授
(Member of West Asia Subcommittee, JCIC-Heritage / Professor, Faculty of Letters, Art and Science, Waseda University)

早稲田大学大学院文学研究科博士課程満期退学、早稲田大学文学部助手を経て、現在、早稲田大学文学学術院教授。早稲田大学エジプト学研究所所長。日本オリエント学会常務理事。専門はエジプト学、考古学、文化財学。



前田耕作 (Kosaku MAEDA)

文化遺産国際協力コンソーシアム副会長 / 和光大学名誉教授
(Vice-chairperson, JCIC-Heritage / Professor Emeritus, Wako University)

名古屋大学にて美学・美術史を学び、1964年～1977年にアフガニスタンの古代仏教美術の考古学的調査に携わる。1975年～2003年和光大学教授。2003年よりユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるパーミヤン遺跡の保存事業に参加。現在、ユネスコ・アフガニスタン文化遺産保護国際調整委員会委員、平山郁夫シルクロード美術館評議員、日中文化交流協会常任理事、アフガニスタン文化研究所所長などを兼任。『巨像の風景』『アフガニスタンの仏教遺跡パーミヤン』など著書多数。



関雄二 (Yuji SEKI)

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会会長 / 国立民族学博物館研究戦略センター教授
(Chairperson, Latin America and Caribbean Subcommittee, JCIC-Heritage / Professor, Center for Research Development, National Museum of Ethnology)

専門は、アンデス考古学、文化人類学。1979年以来、東京大学アンデス調査団のメンバーとして、南米ペルー北高地の祭祀遺跡を中心に発掘調査をおこない、文明の基礎が成立した形成期(前2500年～紀元前後)の社会の成立と変容の解明に取り組んでいる。また、文化遺産の保全をめぐる地域社会と国家、ユネスコとの関係を問い直す研究をラテンアメリカ各地で進めており、その一環としてペルー北高地の農村において、遺跡博物館を核とする村落開発、あるいは国際協力機構が進める観光開発計画策定作業などに携わってきた。著作として、『古代アンデス権力の考古学』(京都大学学術出版会、2006年)、『グアテマラ内戦後 人間の安全保障の挑戦』(明石書店、2009年、編書)など。

第8回 文化遺産国際協力コンソーシアム 国際シンポジウム 報告書
「世界遺産の未来—文化遺産の保護と日本の国際協力」
2014年2月発行

[連絡先]

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
(独) 国立文化財機構東京文化財研究所気付
文化遺産国際協力コンソーシアム事務局
Tel. 03-3823-4841 / Fax. 03-3823-4027
<http://www.jcic-heritage.jp/>



JCIC-Heritage

2013年 第8回 文化遺産国際協力コンソーシアム シンポジウム 報告書

世界遺産の未来 —文化遺産の保護と日本の国際協力

JAPAN CONSORTIUM FOR INTERNATIONAL COOPERATION IN CULTURAL HERITAGE INTERNATIONAL SYMPOSIUM